
無神論者たちの唄

すずひめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無神論者たちの唄

【Zコード】

Z3684Z

【作者名】

すずひめ

【あらすじ】

『三つめ』の核爆弾が新宿に投下されて数十年。かつて『日本』と呼ばれた国は、合衆国政府の元で管理統治されていた。政府とつながりの深い医療系企業『ナショナル・エイド社』の特殊工作員・橘 菊花は、ある日同社の研究者である川島博士に呼び出され、一枚のメモリーチップを託される。「この中に入っている実験データを社外に持ち出して、世間に公表して欲しい」次々に襲いかかる刺客たち。メモリーチップに隠された驚くべき秘密とは？ 手術によって特殊能力を身につけた女工作員が、企業の陰謀に巻き込み

れ翻弄されていく様を描きます。常にピンチと隣り合わせで進行する、ノンストップ・ヒロインアクション。二日に一度、午後十時更新にて集中連載いたします。よろしくお願いします。なお本作は、2010年11から2011年2月にかけてpixivにて連載していたものの転載です。

前章（1）「川島病院」

「……クドウさん……聞こえますか、クドウさん……もう大丈夫ですかね」

朦朧とする意識の中、誰かが彼を呼ぶ声が聴こえた気がした。張りのある、若い女性の声だった。

絶え間ない銃声と爆音の直中にいたはずだった。

次々と倒れていく仲間と、鼻を衝くような血の臭い。瓦礫となつた街は爆発による粉塵でほんの数メートル先も見えなかつた。彼自身の体も埃にまみれ、口の中がパサパサに乾いていた。度重なる爆音で一時的に遠くなつた耳は、なかなか聴力を取り戻さなかつた。身体じゅうに纏わりつく血液は、仲間のものなのか、敵のもののか、それとも彼自身のものなのか。

ぼろぼろになつた軍靴越しに、何か小さなものを踏んだ。その瞬間、凄まじい熱波に体が吹き飛ばされるのを感じた。

「クドウさん！ しつかりしてください！」

とうとう、天使がお迎えに来たか。良かつた、もうあんなところはごめんだ。俺を早く天国へ連れて行ってくれ。

彼は目を閉じ、天使の声に身を委ねた。

ケイイチがはつきりと目を覚ましたのは、何度も何度も夢と現の間を行き來した後だつた。

最初は自力で瞼を開けることもかなわず、ようやく開いた薄目にも視界にぼんやりともやが掛かり、辺りの状況は判別できなかつた。ただ酷い音を聞き続けた耳に、あの天使の声が彼の名を呼ぶ声だけははつきり聽こえた。

「クドウさん？ 気が付かれたんですか？ ああ、まだ無理に動いちゃ駄目ですよ」

彼はただその声に導かれるように、意識の糸を辿つた。

徐々に視力を取り戻した田が最初に輪郭を捉えたのは、白っぽい服を着た女性の姿だつた。

何故戦場に女がいるのかと意識が混濁したが、その白いシルエットから、彼女は看護師なのではとぼんやりと思つた。だとしたら、ここは病院だ。

ふつくらとした胸元　白衣の左胸に『川島』と書かれたネームプレートが見えた。そのままに、サイドでまとめられた長い髪が揺れていた。その栗色を上へと辿つていくと、優しい笑顔を浮かべた若い女性の顔があつた。

「クドウさん、クドウ・ケイイチさん。おはようございます！ あなたが目を覚ましてくれて、嬉しいです」

「な、まえ……」

ケイイチは擦れた喉を振り絞つて声を出した。

「え？」

「ど、して……おれ、の……なまえ……」

途切れ途切れだつたが、彼が意図したことはちゃんと云わつたらしく、彼女は苦笑しながらもそれに答えた。

「だつて、あなたの認識票に、そう書いてあつたから。クドウ・ケイイチ三等陸尉さん」

馬鹿な質問をしたと、ケイイチはぼんやりした頭でこいつそり恥ずかしくなつた。

自衛隊に所属する者に与えられる、いわゆるドッグタグ。戦場で力尽きたとき、死体が原形を留めていなくても個人を識別するため

のものだ。彼のドッグタグは、まさしくその役目を果たしたのだ。

「クドウさん、あなた運がいいわ。ここに運び込まれるのが早かつたから、処置が間に合つたの」

川島看護師は心底嬉しそうに、そう言った。

ケイイチは試しに右手を動かそうとした。指先が僅かに動くのを感じたものの、それはなぜか自分のものではないような違和感があった。右手だけではない。両脚の感覚もいまいちで、何だか借り物のような気がした。明確に感覚があるのは左手だけだ。自分の身体はどうなつてしまつたのか。問い合わせるように視線を向けると、彼女はその意図も汲み取つたようだつた。

「ああ、まだ動かない方がいいですよ。クドウさんの手足は……」

彼女はそこで一瞬言葉を切り、躊躇つように視線を動かした後、再びゆつくりとした優しい声で続けた。

「クドウさんの手足は、少し、損傷が酷かつたから……右腕と両脚を義体に交換する手術をしたの。明日から徐々に、リハビリを始めるでしょうね」

ギタイ?

一瞬、何と言われたか分からなかつた。

「じめんなさい、聞き慣れない言葉よね。義体、つまり造り物の身体のこと。義手と、義足を手術で付けたの。大丈夫、慣れれば元の自分の手足とほとんど同じに動かせるようになるはずだから。元通りの生活を送れるようになるわ」

何だつて?

ケイイチは耳を疑つた。つまり自分の手足はあの爆風で吹き飛ばされて、なくなつてしまつたということだ。そして何が何だか分からぬうちに、勝手に偽物の手足を付けられてしまつたということらしい。

「……！ つ……、おれの……手、足は……！」

突然ケイイチはパニックを起こし、暴れ始めた。

「どこに……どこにやつた……！」

川島看護師は短く悲鳴を上げ、しかしそうに我に返つて彼をなだめようとした。

落ち着いて、大丈夫だから、きっと慣れるから、『ごめんなさい』

繰り返される彼女の声を聴きながら、ケイイチは暴れ続けた。やがて駆けつけた他の病院スタッフによつて鎮静剤を打たれ、彼は再び深い眠りに落ちていった。

かつて、この国は四つの島全てが自國の土地だったという。

『三つめ』の核爆弾が新宿に落とされ、国としての機能が停止したのはもう一十年も前のことだ。

以来、この国は合衆国の管理統制下に置かれている。それゆえ核爆弾は合衆国の陰謀ではないかという噂が、当時からまことしやかに流れていた。各地で合衆国に対する反乱が度々勃発し、また放射能汚染は依然としてあちこちに残されている。この国はかつての繁栄からは見る影もない程、治安の悪い国となってしまった。

現在、『国内』には合衆国が管理する『統制区域』と、合衆国の管理を離れて自治を取る『自治区域』、そのどちらにも属さず無法地帯となつてゐる『スラム』が混在している。

かつてこの国の政治経済の中核だった国家機関は全て『統制区域』に入った。公務員は合衆国の所属となり、自衛隊も合衆国軍の傘下に入る形となつた。

一年ほど前、反合衆国を掲げる反乱軍によつて『統制区域』内の主要施設をランダムに爆破するというゲリラ攻撃が行われた。事態を收拾するため、合衆国軍はいくつかある『自治区域』の中でも反乱分子が多くいる『マキ自治区』（旧愛知県）を攻撃した。それが原

因となり始まつた『内戦』は、現在も激しさを増す一方で、収拾の目処も立っていない。

ケイイチの所属部隊は、戦闘の最も激しい地区に配置されていた。合衆国軍は、自衛隊を優先的に危険地区に置いていた。何日も続く攻防に、街はすっかり破壊された。ケイイチの部隊が反乱軍の残党を探して街を捜索していたとき、運悪く敵側の奇襲攻撃に遭つてしまつたのだ。

他の者がどうなつたか分からぬ。ケイイチは足元に仕掛けられた地雷を踏み、右手と両足を失つた。死にかけているところを運よく誰かに助けられ、病院に収容されたのだった。

ケイイチが手術を施した医師と顔を合わせたのは、それから数日後のことだつた。

実際はそれまでにも何度か様子を見に来ていたのだが、ずっと眠つていたため彼にとつてはそれが初対面だつたのだ。

「初めてまして、クドウさん。川島と申します」

落ち着いた声で自己紹介した白衣姿の中年男性は、あの看護師の女性と同じネームプレートを付けていた。

「調子はどうですか？」

川島医師は、定型句のようなその疑問詞をケイイチに投げかけた。銀縁眼鏡の奥の瞳からは、これといった感情が読み取れない。

「僕の手足、どうなつてるんですか？」

ケイイチは医師の質問には答えず、質問を返した。自分の手足がなくなつてしまつたという事実は、そう簡単に受け入れられるものではない。見知らぬ右腕と両脚には、何の感覚もなかつた。

医師は右手で顎を触り、少し考えるような間を取つた。

「まずは、勝手に手術を行つてしまつたこと、謝りたいと思います。しかし、あなたの身体の損傷状態では、そのまま放つておいたら命はなかつたでしょう」

「そのことについては、いいんです。命を救つてもらつたことにはむしろ感謝してゐるくらいだ。僕が聞きたいのは、この手足は一体何なのかつてことなんです。それから、ここは一体どこなんだ。僕の仲間は？ 敵は？ 僕を自衛隊員と知りながら助けてくれたところを見ると、先生は敵ではないようですが……」

川島医師は小さく一、二度頷き、ゆっくりと説明を始めた。

「……まずは一つ目の質問からお答えしましょ。一般的に、義肢『義足』や『義手』と呼ばれるものは、シリコンやゴムでできているものが多い。切断部位に装着して、失った手足の代わりとするものです。しかし、私があなたに施した義体化手術はそうじゃない。その手足は、あなた自身の身体から直接『生えて』います。人工的なものではありますが、もともとの骨や皮膚と同じものでできています。今はまだ違和感があると思いますが、そのうち元のように思い通りに動かすことができるようになるでしょう」

『義体化手術』というのは、患者を一回ゴーランドスリープ状態にし、仮死状態になつた生身の切断部位と人口義肢とある特殊な遺伝子情報を組み込むことで接続する手術だと、川島医師は説明した。「それから一つ目の質問ですが……」これはコマキ地区の外れにある『川島病院』です。だから一応自治区域の中ということになります。この病院は、表向きには大学の研究施設のようになつています。これが病院だということを知つてるのは、私と私の娘、数名のスタッフ、そしてここで義体化手術を受けた患者さんのみです

「つまり、無認可の病院ということですか？」

川島医師は、そこでひとつ咳払いをした。

「有り体に言えば、そういうことです」

ケイイチは少し怪訝な顔をした。

「自治区域内の、無認可の病院 そして自衛隊員も治療する」

自治区域にある病院は自治区民しか利用できないのが通例だった。

同じように統制区民は統制区域内の病院を利用することになつてい
る。

「先生、失った身体から直接生える義肢のことは、僕は今まで一度も聞いたことがありません。自衛隊の中でも戦闘で手足を失った者がいましたが、皆シリコン製の装着するタイプの義肢を使っていた。僕は医療のことには詳しくないが、それはまだ認可の下りていない新しい技術なんぢやないですか？だから無認可の施設で、不特定多数に手術をしている……」

ケイイチの言わんとすることを察したよつて、川島医師は慌てて口を挟んだ。

「私は患者さんを実験対象と思ったことは一度もありません。確かに、失った手足に義肢を接続する遺伝子を発見したのは私ですが……」

川島医師は、ケイイチの目を正面に見据えた。

「私は医者です。一人でも多くの命を救うため、ここで病院を開いています」

川島病院には、十名ほどの患者が入院していた。

ケイイチのような自衛隊員もいれば、コマキ自治区に暮らしていった一般市民もあり、そしてなんと合衆国軍兵もいた。皆この内乱で負傷して身体の一部を失い、義体化手術を施された者ばかりだった。かつては敵同士だった者も、ここではただの入院患者だ。川島医師に命を救われた者として、それぞれがただの一人の人間として生活していた。外はいまだに酷い内戦が続けていたが、川島病院の中だけはユートピアのように平穏だった。

ケイイチの病室には毎日川島看護師が訪れて、身の回りの世話や義肢のマッサージなどをしていた。しかし彼を意識の混沌の中から呼び戻した天使の声は今やすっかり色を失くし、遠慮がちに必要最低限の言葉を発するのみだった。

ケイイチは、最初の日に朦朧とした状態だったとはいえ彼女の前

で取り乱して暴れたことを思い出した。ひょっとしたら彼女は、俺が勝手に義体化手術をされてしまったことに腹を立てていると思うているんじゃないだろうか。彼はそう思った。

「カワシマさん」

ある日マッサージを受けているとき、ケイイチは思い切って声を掛けた。看護師ははつとしたり顔を上げ、小さな声で「はい」と返事をした。

「カワシマさんは、あの先生の娘さんなんだよね？」

「ええ、そうですけど……」

「君のお父さんは、なぜこんな危険な場所で治療を続けているのかな。俺は最初てつきり、先生が自分で発見した技術を試したいが為に、ここで無認可の病院を開いているんじゃないかと思つたんだけど。ここの中の様子を見ると、そうじやないって気がしてきたんだ。君だつて、お父さんについてこんな危険なところで看護師をしている。一体、何のためなんだ？」

川島看護師は少し驚いたような表情でしたが、やがてしつかりした声で話し始めた。

「……三年前、私の兄が、内戦に巻き込まれて死んだんです。クドウさんのように、爆発で手足を吹き飛ばされて、たくさん血を流して。まだその当時は、義体化の技術が完成していなくて……父は出来る限りの手を尽くしたんだけど、結局助からなかつたの。その時今のような手術ができていたら、きっと兄は助かつたわ。だから父は、兄を助けられなかつた代わりに、ここで一人でも多くの人を助けようとしているんだと思います」

彼女はじつとケイイチの目を見つめた。

「それは私も同じよ。だから私、あなたが目覚めてくれて、本当に嬉しかったの」

ケイイチはその真剣な眼差しに、一瞬はつとした。彼女の瞳の中に、芯の強さが映つっていたからだ。

「そうか、俺は君に助けられたんだな。君の声で俺は目覚めたんだ」

川島看護師は彼の言葉に少し顔を紅くして、恥ずかしそうに首を横に振った。

「そんなに大きさなどじゃないわ。クドウさん自身の生命力が強かつたから、きっと無事に目覚めたんだと思いますっ！」

彼女の様子に、ケイイチは思わず噴き出した。少し慌てたような仕草が、妙におかしかつたのだ。一人で笑い続ける彼に、彼女は戸惑つたような表情をしていたが、やがてつられて笑いだした。

ひとしきり一人で笑つた後、彼女は鈴のような声で言つた。

「……ハルカです」

「え？」

「私の名前」

天使の声がこぼれる唇が、優しい自然な笑みのかたちを作つていた。

「よろしくね、ケイイチさん」

川島遙は、入院患者の間ではアイドルのよつた存在だった。

決して美人とは言えないが、笑うと顔全体がくしゃつとなり、口元にえくぼができた。ややふつくらとした女性らしい体つきに、いつもきつちりとサイドでまとめられた柔らかな栗色の髪。何より、誰もが安心感を覚える優しく美しい声の持ち主だった。戦場近くの医療施設であるにも関わらず、彼女がいるだけでぱっと花が咲いたように空気が明るくなつた。

ケイイチはいつしか、ハルカに対して好意を抱くようになつていった。彼女の丁寧な看護やちょっとした気遣いに、酷い戦争で傷つき壊れかけていた心が徐々に癒されていくを感じた。爆風と硝煙の中で薄れかけていた太陽が顔を出し、彼の心を温めていくよつた氣

がした。

ケイイチがようやく義体の足で立ち上がれるようになったのは、入院から数ヶ月が経つころだった。

彼はいつもの病室で、ベッドに腰掛けた状態からハルカの助けを借りてゆっくりと立ち上がった。最初はうまく脚に力が入らず身体を支えるのに苦労したが、向かい合った彼女の腕に支えられながらどうにか直立することができた。

「ケイイチさん、おめでとう！」最初はバランスが取りにくいかも知れないけど、大きな第一歩ね。きっとすぐに自由に動き回れるようになるわ」

ハルカは顔全体でこくりと笑い、心から嬉しそうにそう言った。今まで気づかなかつたが、こうして立ち上がつてみるとハルカは思つたよりも小さかつた。

これまでベッドに横たわつた状態か、良くても腰かけた状態でしか彼女と接していなかつたので、見下ろされることばかりだつた。「看病される」という状況がハルカを少し大きく見せていたが、實際彼女の身長は女性としては平均的だ。もともと背が高くてがつしりした体つきのケイイチから見れば、大抵の女性は小さくて当然だつた。

しかし彼の感じたハルカの「小ささ」は、そういうことではなかつた。このように向かい合つて並んでみると、彼女はこここの看護師というよりもずっと、川島遙という一人の女性だつたのだ。

その彼女が今、至近距離で彼を見上げている。

優しい笑顔が目の前で揺れる。触れ合つた腕が熱い。

気付いた時には身体が勝手に動いていた。

ハルカに支えられて立つた状態から、両腕をするりと彼女の背中にまわす。ハルカの身体はケイイチの腕の中にはっぽりと納まる格好になり、その時一瞬彼女が驚いて身を緊張させたのが分かつた。

「ケ、ケイイチさん……？」

「ハルカ、ごめん。しばらくこのつをせしてくれ」
ハルカが身じろぎするのにも構わず、ケイイチは唯一生身の左腕に力を込め、彼女の腰をそっと引き寄せた。

彼女の身体はとても柔らかく、頬に当たる髪からは甘い匂いがした。心臓の鼓動が、嫌でも早くなる。

一瞬のよつよつな永遠のよつよつな時間の後、ケイイチはゆっくりと身体を離した。

すると途端にバランスを失い、背にしたベッドにすとんと腰を下ろす格好となつた。ふと見上げると、ハルカは色白の頬を真っ赤に紅潮させ、戸惑つたように立ち戻りしていた。

「ごめんな、急に。びっくりしたよな？」

ハルカは震える唇でどうにか言葉を紡いだ。

「なんで……どうしていきなり、こ、こんなことを……」

「なんでって……そりや、君が好きだから」

ケイイチは、躊躇うことなくさりとてそう言つた。するとハルカは、泣き顔と怒り顔が入り混じつたような複雑な表情を作つたかと思つて、思い切り首を横に振つた。

「か、からかわないでください！」

そう言い放つと、彼女は病室から走つて出ていってしまった。

「からかってなんかいないんだけどな……」

ケイイチはひとりごちたが、ふと、病室、白衣のナース、手足が不自由な患者の男……と考えを巡らせた後、からかつたと思われても無理はないかも、と思い当たつた。確かにこの内戦以降、ずっと溜まつていることは否めないが、決してそういう目で彼女を見たことは……なくはないかも。

ケイイチはため息をつき、やれやれ、と思つた。

翌日、ハルカはいつもの時間にケイイチの病室を訪れた。もう来

ないのではないかと思っていたので、彼は内心驚いた。

しかしやはり昨日の出来事から彼を警戒しているのか、彼女はリハビリのマッサージをしながらもずっと怒ったような表情をしていた。

ケイイチは気まずさを感じながらも、彼女のそういう表情を新鮮だと、こっそり思った。

次の日も、更にその次の日も、ハルカはやつてきた。しかし相変わらず怒った表情を崩さず、必要以上の言葉も発しなかった。

「あのや、ずっと不思議に思ってたんだけど」

思い切って声を掛けると、ハルカは一瞬びくりと身体を震わせた。「この病院の物資、どこから調達してるんだ？ 表向きは大学の研究施設つことにしてるって話だけど。それにしても、手術や治療に必要な消耗品はやっぱり誤魔化せないと思うんだ」

ハルカは肩をすくめた。

「……私の母が、ナショナル・エイド社にいるの。こここの物資はうまく母に工面してもらっているんです

「なるほど、医療一家つて訳だ」

ナショナル・エイド社は国内最大手の医療系メーカーである。

もともとは小さな薬品メーカーだったが、内戦が始まつて以降合衆国軍へ医療物資を提供し、一気に規模を拡大させた。今や薬品だけでなく、様々な医療機器の開発も行つていて、まさに戦争特需の恩恵を受けた企業だ。それゆえ、統制区域以外での評判は最悪だった。

「じゃあ、お母さんの立場は危険なんじゃないか」

「そうよ。危険を承知の上で、私たちをここへ送り出してくれたの」
ケイイチは、いつか彼女が内戦で兄を失つたという話をしていたことを思い出した。一人の若者の死が、家族を強く結びつけたのだろう。

考え込む彼をよそに、ハルカはてきぱきといつもの処置を終え、

片付けを始めた。

「……まだ怒ってる？」

「さあ、何のことかしら」

彼女は視線を手元に落としたまま、感情のこもらない声で淡々と言つた。

まいつたな。彼は頭を搔いた。

「ハルカ、この前はいきなり抱き締めたりして悪かったよ。でも勘違いしないでほしいんだが、別に俺は君の身体に触りたいとか、そういううんじや……」

ばん！

ハルカが救急箱を思い切りよく締める音が部屋じゅうに響き、一瞬遅れて静寂が訪れた。

「ケイイチさんのバカ！ 何にも分かつてないんだから！」

その言葉を受け、ケイイチは思わずムッとした。

「バカとは何だよ。確かに俺は君に酷いことをしたかもしれないが、そこまで言われる筋合いは……」

「あるわよ！ ……好きな人からいきなり身体を触られたら……シヨツクに決まってるじゃない！」

ケイイチは今にも泣き出しそうなハルカの顔を見つめ、言葉を失つた。なんだつて？ すきなひとからいきなりからだをさわられたら？

「もうやだ……」

ハルカはそう言つなり、そのままへたりと座り込み、顔を両手で覆つて泣き出した。ケイイチもこれには完全にまいつてしまつた。彼女はどうやら、自分のことを好いてくれていたようだ。しかし不意に取つた自分の行動が、彼女を傷付けてしまつたらしい。

「ハルカ、ごめん……」

ケイイチは少し躊躇いながら、義手の右手をハルカの頭に置いた。触覚はまだ完全ではないが、柔らかい髪だと分かつた。

「俺、無神経だった。でも信じてほしい。俺はハルカ、君が好きな

んだ

今度は細心の注意を払いながら、彼は両手で彼女の震える両肩を包んだ。

「俺は君のおかげでこうして生きてる。だからこれからも、君と一緒にいたいんだ」

ハルカが少しだけ顔を上げた。涙で濡れた瞳が彼を見つめる。ケイイチは彼女を抱き締めたくなる衝動をどうにか抑えた。

「ハルカ、俺に君の手伝いをさせてくれないか。前みたいに動けるよう、頑張ってリハビリするよ。君が俺してくれたように、俺も人の命を助けたい」

どのみち自衛隊では、彼は死亡扱いになつてているだらう。それでなくとも、あのような酷い場所に戻る気はさらさらなかつた。それよりもここで看護師として人助けをするが、よっぽど人として正しい道のように思えたのだ。もちろん、ハルカと一緒にいたいという気持ちもあつたが。

ハルカはまだ少ししゃくりながら、たっぷりの涙声で呟くように言つた。

「……じゃあ、明日から、リハビリ厳しくしなきや……ね？」

柔らかい夕陽の差し込む病室に、二人の笑い声が響いた。

前章（2）「運命の夜」

それから三年の時が流れた。

内戦は相変わらず続いていたが、コマキ自治区の戦闘は緩やかに納まりつつあった。

それゆえ、以前のように即刻義体化手術が必要な酷い状態の負傷者が運び込まれることは少なくなった。その代わり川島病院では内戦で負傷した患者だけではなく、一般的の病人も受け入れるようになっていた。すなわち病気で失った臓器の代替として、義体化技術を応用したのだ。そのせいか相変わらず表向きは病院の看板を出していなかつたにも関わらず、川島病院の評判は徐々に広まっていた。

しかし病院としては無認可というリスクを負っているため、信用のおけるルートからの口利きでやつていた患者以外には断固として大学の研究施設を装い、追い返した。例えそれが、今すぐに義体化手術をしなければ助からない状態の者であつても。そのため川島医師は、医者としての使命と自らの保身の間で、葛藤していた。

ケイイチは三年前に付けた右腕と両脚の義肢をすっかり自分のものにしており、負傷前と同じように生活できるようになっていた。彼は川島病院の看護師として、かつて自分がハルカにもらつたように、義体化手術を受けた患者たちの身の回りの世話をしていた。同じ仕事をしていると、ハルカの仕事がいかに丁寧で心のこもつたものか身にしみて実感することができた。その度にケイイチは彼女を尊敬し、また愛情の念が深まっていくを感じた。

ある日ケイイチが院長室を訪れるとき、川島医師は電話中だつた。しかし彼が入つて来たことに気づくと、医師は慌てたように受話器

を置いた。

「あ、すみません、お電話中でしたか」

「ケイイチくんか。いや、大した電話じゃないからいいんだ」

川島医師の態度に若干の違和感を覚えたが、特に追求はしなかつた。このところ彼は、いつも何か思い詰めたような難しい表情をしているのだ。ケイイチは気にしないふりをして、要件を伝えた。

「三一一号室のトバリくんのことですが、移植した人工心臓の動きが芳しくありません。手術をしてから何度も目は覚ましたんですが、意識がはつきりしないようです。たまに苦しそうにうなされていま

す」

一週間ほど前に重度の心臓疾患で運び込まれた少年のことだった。「どうか。人工心臓の移植はまだ症例が少ないからな。理論的には問題ないはずなんだがな。分かった、一度様子を見るとしよう」

三一一号室の前まで来ると、ちょうど部屋から慌てた様子のハルカが出てきた。

「あ、お父さん、ケイイチさん……！ 大変なの、トバリくんの身体に変な癌が……！」

「なんだって？」

急いで病室に入ると、ベッドには瘦せた少年が横たわっていた。そこはだけた胸元の、ちょうど心臓の部分 先日手術を行った部分に、黒い浮腫が浮かび上がっていたのだ。

「これは……腐敗……？」

川島医師が呟くのとほぼ同時に、トバリ少年の身体につなげられた心音図のモニターが直線を描き、ピーという無機質な音を発した。彼の心臓が動きを止めた証拠だった。

「先生、心臓マッサージしますか？」

川島医師は眉間に皺を寄せながら、低い声で呟くよつと囁いた。

「いや そのまま解剖に回す」

トバリ少年の遺体を運び入れた後、川島医師を一人残し、ケイイチとハルカは一階の手術室を後にした。

「ケイイチさん、ちょっと時間いいかな。少し相談したいことがあって」

仕事に戻る途中の廊下でそう言つたハルカの顔は、酷く青ざめていた。

「俺の部屋で話そつか？」

ケイイチは彼女が言わんとするふうを察し、一階東端の白室へと促した。

「お父さんのことなの」

ハルカは彼の部屋のベッドに腰を下ろすなり、思い切つたようになに言葉を発した。

「俺も気になつてた。最近の先生、ちょっと様子がおかしいよな」「そうなの……さつきだつて、あの状況で延命措置をしないなんてこと、今までなかつたのに」

あのトバリ少年のことを、目の前で消えていく命ではなく、研究対象として見ていた。川島医師の言動は、ハルカの目にはそんなふうに映つた。リスクを冒しても人の命を救いたいといつここれまでの父の意思からは、考えられない行動だった。

ケイイチは頷いた。

「それに、このところしきりに誰かと電話をしているみたいだ。何となく、様子がおかしい気がする」

「そうね。最近 いいえ、重病患者を断り始めたころから、少しおかしくなつたように思う。そりやあ私だつて、助かる命を見捨てること、なかなか受け入れられないけど……」

ハルカは視線を自分の膝に落とし、じつと何かを考え込むよつこ押し黙つた。ケイイチは肩をすくめ、努めて明るい声を出した。

「ともかく今は、俺たちにできることをするしかないよ。きっと、先生は先生なりに考えがあると思うんだ。先生を信じよ。ほら、患者さんの巡回の時間だ。ともかく、今入院している患者さんのケ

アをしつかりしないと

「そうね、そうよね……ありがとう、ケイイチさん」
彼女は自分に言い聞かせるように咳き、顔を上げて立ち上がった。
そしてケイイチの部屋から出していく間際、ふと彼を振り返り、少し
元気のない笑顔で言つた。

「……また今夜、来るわ」

ガラスの割れる音で目が覚めたのは、その日の夜中だった。

かつて些細な音でも目覚めるように訓練を受けていたケイイチは、
その小さな音でベッドから飛び起きた。心臓が早鐘を打つ。何かと
てつもなく嫌な予感がした。

ケイイチは隣で眠っているハルカを振り起した。最初は少し寝ぼ
けていた彼女だったが、彼のただならぬ様子を感じ取り、覚醒した
ようだつた。

一人はすばやく服を着、ゆっくりと部屋の戸を開け、廊下の様子
を伺つた。

「何か聞こえる」

ケイイチは薄暗い廊下に目を凝らしながら、耳を澄ませた。微か
ではあるが、一階から複数の足音が聞こえた。それに混じり、プシ
ュン、プシュンという音が断続的に響く。ケイイチは背中に冷や汗
が伝うのを感じた。

ハルカが小さく声を漏らす。

「何の音？」

「銃声だよ……サイレンサつきの」

何故、ここで銃声が聞こえるのだ？ ケイイチは表情を強張らせながら、抑えた声で言つた。

「俺が様子を見てくるから、ハルカはここで待つてろ」「嫌よ。こんな怖いところに、一人で置いていかないで」

ハルカはケイイチの腕にしがみついた。彼は一瞬迷つたが、様子

を見に行つた隙に彼女に危険が及ばないとも限らないので、承諾した。

一人が廊下に踏み出そうとした矢先、例の足音が階段を上つてくるのが聞こえた。なるべく音が立たないような足運びで、複数名が上つてきたようだつた。少なくとも一般人ではない雰囲気である。

ケイイチは慌てて扉を閉め、とりあえずクローゼットに身を隠した。

彼はハルカの身体を抱き締めながら、廊下の物音に耳を澄ませていた。どうやら賊は一室一室の扉を開け、発砲しているようだつた。眠つてゐる入院患者や病院スタッフに向けて発砲してゐるのだろうか。このままでは、この部屋に彼らが侵入してくるのも時間の問題だ。

「ハルカ、ちょっと腹を括つてくれよ」

彼女は言われるがまま、じくじくと頷いた。

ケイイチの部屋の扉が賊によつて開かれたのは、そのすぐ後だつた。真っ先に部屋に入つて來た黒ずくめの男は、すばやく銃を構えて部屋の中を確認した。ベッドの中、机の下。見たところ、人影らしきものはない。この部屋には誰かがいたような熱反応があつただが。

男は扉の死角となつてゐた壁面に、クローゼットの戸があることに気づいた。ゴーグルのサーモスコープは、その扉の奥に熱反応を感じしている。

彼はゆっくりとした足取りでそこへ近づき、銃を構えながら扉の取つ手を手前に引いた。

しかしそこにはいくつかのジャケットやコートが掛つてゐるだけで、誰もいなかつた。つい先ほどまでここに誰かが隠れていたのだろう。

彼は他の仲間に、ここには誰もいないから次へ行け、と手で合図を出した。自身も別の部屋へ向かおうと廊下へ出る。しかし最後にもう一度部屋の中をちらりと見やつた際、窓がわずかに開いていることに気づいた。

彼は再度ケイイチの部屋に踏み込み、窓を開け、外を確認した。

ここは一階であり、当然誰もいなかつたが、その窓の真横には梯子があつた。恐らく、外の配管点検用の梯子だろう。一階から屋上に向けて壁に取り付けられていた。

病室のある一階か、院長室のある二階か。この部屋の住人は、この梯子から上もしくは下へ逃げたのだろう。一階は既に制圧済みであり、見張りに一人残してあつた。この部屋は構造からして病院スタッフのものだ。危険に気づいて院長室に向かつた可能性がある。男は部屋を出ると、二人の部下を連れて三階へ向かつた。

ケイイチとハルカは、梯子を伝つて階下の部屋へと降りていった。その部屋は、一ヶ月ほど前に右脚の義体化手術を受けた男性患者の病室であった。

「フジノさん！ 大丈夫ですか！」

一人は即座にベッドに駆け寄つた。しかしその瞬間ハルカは小さく悲鳴を上げ、両手で顔を覆つた。

その男性はベッドに横たわったまま、頭を撃ち抜かれていたのだ。ケイイチは薬莢と血の混ざつた臭いに顔をしかめた。一体何が起こっているというのだ。何が目的で、犯人グループは無抵抗の人間を射殺したのだろう。

統率の取れたやり口、サイレンサつきの銃。相手はよく訓練されたプロの集団であることに間違いなさそうだ。しかしこの病院がこのような襲撃に遭う理由は、彼には全く分からなかつた。引っかかることと言えば、最近の川島医師の様子ぐらいなものだ。

「とにかく、先生を探そう。いつも夜は、研究室に籠っていたはずだよな」

研究室はこのフロアの西端。今一人がいる病室とは、逆の端に位置する。つまり、一階を端から端まで移動しなければいけないということだ。

病室の中から耳を澄ませたが、廊下は静かだった。犯人グループは皆一階に移動したのだろう。しかし見張りを残している可能性も否めない。

ケイイチは用心深く、ゆっくりと扉を手前に引いた。そしてその隙間からそろりと顔を出し、廊下の様子を伺った。この廊下は一直線で、ちょうどその半ばほどのところに犯人の一人が背中を向けて立っているのが見えた。その男がゆっくりとこちらを振り返る。ケイイチは慌てて顔を引っ込め、すばやく、しかし静かに扉を閉めた。まずい。気づかれたかもしれない。

彼はハルカに、柱の陰に隠れるように合図した。いよいよ正念場か。彼はぐくりと唾を飲み込んだ。

一階を見張っていた男は、視界の端に何かが動くのを捉えていた。廊下の突き当たりの部屋の辺りだ。既にこのフロアは、入院患者もスタッフも全員始末している。自分と、建物の入り口を見張っている仲間の、二人しかいないはずだった。気のせいかと思ったが、万が一仕留め損ねがあつてはいけない。

男はゴーグルのサーモスコープをオンにして、ゆっくりした足取りで東端の部屋に近づいて行つた。

サーモスコープは、東端の部屋の中に熱反応を感じていた。壁越しでは反応は薄くなるが、明らかに生きた人間のものだ。男は銃を構えながら勢いよく扉を押し開けた。すると柱の物陰に、

スコープが人型の熱反応を捉えた。彼はそこへ銃口を向け、ゆるりと近づいて行く。

しかし次の瞬間、男は後頭部に強烈な衝撃を受け、地にねじ伏せられた。

何が起こったか理解できないまま無理矢理首だけで振り返ろうとしたが、続けざまに棒のようなもので頭部を殴打された。

ゴツ、ゴツ、という鈍い音が容赦なく何度も響き、ついに男は動かなくなつた。

絶命した侵入者を見下ろして立つていたのは、ケイイチだった。彼は部屋に置いてあつた松葉杖を手に、部屋の扉の内側に潜んでいたのだ。

すぐさま、ケイイチは男が持っていた銃を手に取る。見覚えのある型の銃だった。確かに、内戦で一緒になつた合衆国兵が持っていたものと同じものだ。またこの男がしているゴーグルは、合衆国兵が暗所で作戦を行うときに使用するサーモスコープだった。

何故合衆国軍が？

ケイイチは混乱したが、今はゆつくりそのことを考えている暇はないさそうだ。

「ハルカ」

ケイイチは柱の陰に向かつて声を掛けた。おずおずと姿を見せたハルカは、暗闇でもそうと分かるほど青やわ、がたがたと震えていた。

「俺の傍を離れるなよ」

彼は銃を手に、廊下へと踏み出した。

そろそろと廊下を進んで行く一人の目に、部屋から出ようとしたりところを撃ち殺された女性スタッフの亡骸が映っていた。

仕事熱心で、患者想いのスタッフだった。恐らく、物音に気づい

て様子を見ようと外へ出たところを襲われたのだろう。ケイイチは胃の辺りがきゅっと締め付けられたような息苦しさを感じた。

この建物は、一階の半ばほどに玄関がある。ケイイチは廊下を少し進んだ辺りで、闇に溶けるような黒ずくめの男の姿を捉えた。不審な物音に気づいて少し持ち場を離れたもう一人の見張りの男だった。

「ハル力、走れ！」

ケイイチの合図で、ハル力は廊下の西端、川島医師がいるであろう研究室に向かつて走り出した。

その一瞬、走り抜けていく彼女に気を取られてできた男の隙を、ケイイチは見逃さなかつた。

躊躇いなく引き金を引いた一発目の銃弾は、男の左大腿に命中した。

痛みの余り動きが鈍つた男に、ケイイチは続けざまに二発目、三発目を撃ち込んだ。

それぞれが右頸部、眉間に撃ち抜き、ぱっと花が散つたように血液が噴き出す。

そのまま男の身体は崩れ落ち、動かなくなつた。床に赤い血だまりが広がるのを見て、思わず胃液が逆流しそうになるのを彼は堪えた。

かつて自衛隊員として内戦に参加していたころ、ケイイチには戦う理由が何一つ分からなかつた。そのことについて、上官によく怒鳴られたものだつた。彼は射撃の腕は悪くなつたが、いざ銃撃戦となると引き金に掛けた指が石のように硬直し、撃てなくなつてしまつたのだ。自分の撃つた銃弾が、いつか誰かの命を奪うかもしれない。そう思うと怖くて堪らなかつた。

しかし今は違う。自分の身と、何よりもハル力の身を守るために、ケイイチは躊躇うことなく引き金を引いていた。ハル力を失うことには比べたら、それ以上に怖いことなどなかつたからだ。彼は今しがた撃ち抜いた男の死体に一瞥もくれることなく、先に研究室に入つ

て行つた彼女の後を追つた。

「川島先生？」

研究室に、医師の姿はなかつた。もしこの部屋にいたのであれば、奴らに殺されていてもおかしくないが、死体すらなかつた。よもや今夜に限つて院長室にいたのだろうか。だとしたら、もう助けに行くことは不可能だ。

ハルカはへたりと床に座り込み、自分自身を抱き締めた。そして今にも泣き出しそうな顔で、かたかたと震えていた。殺された入院患者やスタッフ、ケイイチが殺した一人の侵入者。看護師という仕事柄、人の生き死には常に身近に関わってきた彼女だが、今夜の出来事はそれまでの日常から余りにかけ離れていた。加えて、彼女の父親は行方知れずだ。

身を震わせるハルカを、ケイイチは思わず抱き寄せた。

「怖い目に遭わせてごめんな」

ケイイチはハルカの髪をゅっくり撫で、肩を抱いた。

川島医師が見つからない以上、一刻も早くこの建物から脱出しなくてはならない。しかしそうこうしていいるうちに、再び複数の足音が一階に下りてくるのが聞こえた。三階まで制圧し終えた犯人たちが、戻ってきたのだ。

まずい。奴らはすぐに、仲間が殺されていることに気づくだろう。そして仲間を殺した者がどこに潜んでいるか、再び建物じゅうを隈なく探すに違いない。この研究室に彼らが踏み込んでくるのも、もう間もなくだろう。この部屋には脱出できるような窓もないのだ。焦る気持ちとは裏腹に、打つ手は何もなかつた。

足音が、二人のいる部屋に近づいてくる。

諦めかけたその時、ケイイチの目には信じられないものが映つた。研究室の床の一部が、独りでに動いたのだ。

ごどりと音を立てて外れた床から、なんと川島医師がひょっこりと顔を出した。

医師はそして、険しい表情で言った。

「ハルカ、ケイイチくん。早くこの中に入るんだ」

研究室の隠し階段を降りた先は、だだつ広い地下室になっていた。上の研究室は書斎と言つても差支えないような雰囲気だが、この地下室は紛れもなく「研究室」だった。中央に手術台があり、四方の壁に備え付けられた棚にはびっしりと何かのホルマリン漬けが並べられていた。

ここで川島医師が何を行つていたのか、想像しようとするとまた胃が締め付けられた。彼は医者である前に、研究者だということなのかもしない。

「二人とも無事だつたか」

川島医師は少し安堵したような表情を見せながら、そう言つた。ハルカは戸惑いがちに辺りを見回し、問い掛けた。

「お父さん、この部屋は……？」

「ここは私の研究施設だ。義体化技術をより確実なものにするため、密かにここで研究を重ねていた。たまたま地下室にいたから、侵入者に気づかれずに済んだようだ」

医師の言葉に、ケイイチはおずおずと口を開く。

「先生、そのことなんですが……」

ケイイチは侵入者たちがつけていたサーモスコープのことを説明した。また彼らが合衆国軍兵に支給される銃を所持していたこと、統率のとれたプロの集団であることも付け加えた。先ほどは運よく見つからずに済んだが、研究室を限なく熱感知されればこの地下室が発見されるのももはや時間の問題だ。

ケイイチの話を聞いて、博士は唸つた。

「そうか、それは厄介だな。恐らく奴らの目的はこの私だろう。それでも全員を皆殺しにするとは」

「先生、あいつらは一体

ケイイチが一番気になつていていたことを聞こうとした瞬間、上の部

屋の扉が開け放たれる音が聞こえた。

「説明したいところだが、時間がないようだ。あいつらはサーモスコードを使っているんだろう。私に良い考えがある」

医師はそう言うと、地下室の隅にある大きな装置の前まで二人を案内した。それは棺桶のような形をして、蓋の部分がガラス張りになつてゐるものだつた。同じものが横に並んで二台、置かれていた。「これは新型のコールドスリープの装置だ。君たち一人は、これで一時的に眠りなさい。そうすれば、奴らのゴーグルにも熱反応が映らなくなるだろ?」

「しかし先生は……」

「私のことは心配いらない。奴らの狙いは私だ。私一人であれば、どうにか切り抜けられるだろ?」

ケイイチとハルカは顔を見合させた。一体どういうことなのか。聞きたくて堪らなかつたが、医師の言つとおり時間がない。選択の余地はなさそうだった。

「私の身が無事ならば、危険が去つた後でコールドスリープを解除しに来る。しかしそうでない場合は、最長一年でタイマーが切れるようになつてゐる。そうならないことを祈るが、もしもの時はケイイチくん、ハルカを頼む」

いまいち釈然としない部分はあるが、医師の真剣な眼差しにケイイチは頷く他なかつた。そういうば久しぶりに、川島医師の目を正面から見据えた気がする。そこにはここ最近の浮かない色はなく、信念を貫き通す確かな意志があつた。

二人はそれぞれ装置の中に横たわつた。

ケイイチは義体化手術を行つた際に一度コールドスリープを経験しているはずだつたが、意識がなかつたためどのようにもののか全く知らなかつた。

「おやすみハルカ、ケイイチくん」

川島医師はそう言うと、装置の蓋をするスイッチを押した。

蓋が閉まるごとに、装置の中は完全な密室だった。やがて、装置内部は霧状の冷却麻酔剤で満たされていった。

意識が落ちる一瞬前、ケイイチは薄もやの掛ったような声で呟いた。

「ハルカ……目が覚めたら、俺と結婚してくれ」

その声が、ハルカに届いたかどうかは分からぬ。だが、微かにくすりと笑う声が聞こえたような気がした。

ケイイチは、いつもと変わらないハルカの優しい笑顔を瞼の裏に見た。そして意識は暗闇の中に落ちていった。

第1話・一ヶ月前「特殊工作員 橋 菊花」

彼女はその薄暗い部屋で、パソコンのディスプレーをじっと見つめていた。

作業進度を示すゲージは、33%、34%と少しずつ伸びていく。ぴったりとした黒いボディースーツがモニターの明かりを反射し、彼女の身体のラインを淡く浮かび上がらせていた。55%、56%。彼女は部屋の外 ぐぐもつた非常灯の明かりを漏れさせる廊下を気にしながら、この永遠のような時をじつと耐えていた。焦りは禁物だ。このデータのコピーを完了させて無事に持ち帰らなければ、綿密に練った計画が台無しになる。博士の研究も、完成が遠くなることだらう。だから失敗は許されない。89%、90%。

そのとき廊下の方から、カツカツという足音が近づいてくるのが聞こえた。彼女は身を緊張させ、右大腿のホルスターに挿した銃のグリップに手を伸ばす。警備員だろうか。懐中電灯のような光が、廊下に面した曇りガラスをちらちらと鈍く照らしていた。98%、99%。

「データの保存が完了しました」という文字がモニターに映し出される。警備員が鍵を開けるのに手間取っている間に、彼女はしばらく端末からメモリー チップを抜き取り、電源を落とした。

扉が開けられるが早いか、彼女はその瞬間に右の足首をぐつとならせ、反動で高くジャンプした。空中に舞い上がった身体は、そのまま天井の通気口に吸い込まれていった。

見られたかもしれない。

彼女は暗い通気ダクトの中を匍匐前進しながら、脱出経路を頭の中に展開していた。後ろでひとくくりにした長い黒髪が肩口に垂れ、一步一步と進む度に揺れる。道すがら通気口の金網から真下の部屋

の様子を伺うと、複数の警備員がばたばたと走り回っているのが見えた。どうやら大事なデータを盗んだ犯人を捕まえるために、警備体制が強化されたらしい。姿を見られないよう、彼女は身をよじらせて金網を避けながらすばやく通過した。

まっすぐ行つて突き辺りを右。一区画田の角を左。焦つて道を間違えたら元も子もない。正面の梯子を下れば、地下水路へと脱出できるはずだ。

彼女は手探りで一步ずつ確実に歩みを進め、辿り着いた梯子を一気に駆け下りた。足を着いたところは、水路の中の細い支流だった。ちよろちよろと細い溝を流れる水はすぐ先で本流と合流していた。「ううう」と大きな音が鳴り響き、彼女の足音を搔き消す。

懐中電灯を点けて用心深く進み、本流に出る。

その瞬間、彼女の耳はかちやりという僅かな音を捉えた。彼女は反射的に銃を抜き、構えた。しかし突然眩しい光を当てられ、目が眩んでしまう。

気づけば 三人の男が、彼女に対して銃を突き付けていた。この状況で抵抗する手はない。彼女はゆっくり両手を上げながら、懐中電灯と銃を下に落とした。

「ほら、俺の言った通りじゃねえか。脱出するとしたら水路だつてな」

リーダーらしき男が、下品なダミ声で言つた。彼らの持つ懐中電灯の逆光で、顔ははつきりと確認できない。

「これで手柄は俺たちのもんだぜ」

その男が大きな声で笑うと、他の者も声を合わせて笑つた。

彼女は手を上げたまま、目だけで辺りの様子を伺つた。この柄の悪い三人は雇われ警備兵のようだが、手柄を立てようと単独行動を取りつたのか他に警備員らしき者の気配はない。彼女に銃を向ける男以外の二名は、既に銃を下ろして辺りの様子をきょろきょろと伺つていた。

「しかし、いい女じやねえか。おねえちゃん、単独犯とはやるねえ」

リーダー格の男は、彼女の身体を舐め回すように見て、下劣に唇を歪ませた。汚い乱杭の歯が、ちらりと見えた気がした。

「本当にあんたが盗んだデータを持つてるか、ちょっと調べさせて貰うぜ」

男がいやらしい手つきで彼女の身体に触れようとした、その瞬間だった。

ごく僅かにできた隙を突いて、彼女は男の顎に掌底を喰らわせた。その衝撃で脳震盪を起こし上体をぐらつかせた男の鳩尾に、思い切り右の拳を叩き込む。女性の、いや人間の力とは思えない強烈な一撃にその男の大柄な身体は吹っ飛び、反対側の壁に叩きつけられて崩れ落ちた。

他の二人はその一瞬の出来事に呆気にとられ、大きく隙を作った。彼女は向かって左手にいた男の側頭部に、回し蹴りを喰らわせる。右膝が彼の頭蓋を碎く鈍い音がした。

その間どうにか態勢を立て直した最後の一人が彼女に向けて発砲したが、彼女はそれを背中ぎりぎりでかわし、振り向きざまの反動を利用して彼の顔面に右ストレートを叩き込んだ。

ほんの、五秒程度の間の出来事だった。彼女を取り囮んだ三名の警備兵は、あつという間に戦闘不能状態となつた。

彼女はゆっくりとした動作で愛銃を拾い上げた。最初に倒したりーダー格の男の呻き声が、僅かに耳に届く。彼女はその男の頭部を躊躇うことなく撃ち抜いた。他の一人に関しても、念のため同じようく頭部を撃ち、どごめを刺す。

やれやれ、私としたことが抜かつたな。

彼女は小さく溜息をつき、水路からの脱出口であるマンホールを目指した。

翌日、彼女はとある会社のビルにいた。ナショナル・エイド株式会社、シミズ支社。シズオカ統制区の外れにある、ここが彼女の勤務先だった。

本日の彼女は、細身のグレーのパンツスーツに黒の華奢なパンプスという姿だった。どこからどう見ても、一般の会社員だ。首から提げた社員証にはこう書かれていた。

「特別情報部第三課 副主任 橘 菊花」

タチバナ・キッカ。それが彼女の名前だ。

キッカは朝一番から課長に呼び出され、昨日の作戦の報告と入手したデータの提出を求められた。彼女はデータの入ったメモリーチップを差し出した上で、侵入からデータ奪取、脱出までの経緯を口頭で報告した。

脱出の際に三名の警備兵を殺害したことについては特に咎められなかつたが、報告しながら胸の中に苦々しいものが広がっていくのを感じた。問題にならなくとも、ミスはミスだ。結局、口頭で報告した事項を本日中に文書にまとめて提出するよう指示され、キッカは解放された。

馬鹿馬鹿しい、と彼女は思った。結局文書で提出するのなら、わざわざ口頭で報告する必要などないではないか。もしくは口頭で報告するのであれば文書は省略して良いという決まりに、すれば良いのに。結局ここは「会社」であり、彼女はその末端社員に過ぎないということだ。命を張つて行った仕事は結果だけが文書となつて、社内の上層部に流れしていくのだろう。

キッカは自分の席に戻り、パソコンを立ち上げた。社内のイントラネットにログインし、報告書フォームを探す。定型書式に従つて、先程口頭報告したのと同じ内容を入力していく。備考欄に警備兵三名殺害の旨を記入する際、再び苦い気持ちになつた。痕跡は最小限に抑えて、撤退したかったのに。

かたかたとタイピングを続いていると、キッカに声を掛ける者が

あつた。

「よう、タチバナ。昨日はお疲れ様。大変だったみたいだな」

振り向くと、熊のような風貌をした大柄な男が立っていた。同じ

三課に所属する守野大介だ。

彼女は手を止めて立ち上がり、お疲れ様ですモリノさん、と短く返事をした。

「脱出ルートを警備兵に先回りされるなんて、私もまだまだです」

「それにしても、その三人の警備兵をうんも寸もなく瞬殺しちまうなんて、お前らしいな」

モリノは人の良い笑顔を浮かべながら、豪快に笑い声を上げた。

「ま、何にせよ目当てのデータは手に入つたんだし、どうせこちらの素性は特定できやしねえんだ。気にすることねえよ。今日は早めに帰つてしまふよ」

彼はキツ力の肩を労うようにぽんぽんと叩き、自分の席へ戻つていつた。彼女は少し胸のつかえが取れたようにほつとした気分になり、かたく結んでいた口元を緩めた。

モリノはキツ力より三年ほど入社年次が早く、若手の多い三課では兄貴分だった。孤立しがちなキツ力のこともいつも気にかけてくれる。彼女にとつては、数少ない理解者とも言える存在だった。少し心が軽くなつたような気がして、彼女は報告書の作成に戻つた。

特別情報部第三課は、特殊任務を行う部署だ。

競合他社の機密情報の奪取や潜入捜査など、いわゆる企業スパイ活動を仕事として行つてゐる。中には要人暗殺を含む任務もあつた。その活動はナショナル・エイド社内でもトップクラスの機密事項であり、同課は表向きにはイントラネットの調整・管理を行う部署ということになつていた。実際、任務のない時はその仕事を行つていたので、裏で彼らが何をしているか社内で気づく者はいなかつた。三課の任務は危険が伴うものも少なくないため、所属メンバーは

全て義体化手術によつて特殊な身体能力を身に着けていた。キッカモ例に漏れず、その一人である。彼女は、右腕と右脚、そして心臓を義体化していた。昨日の任務中に発揮した人間離れした俊敏性と攻撃力は、戦闘用義体の力に拠るものだ。彼らは事故や病気等で失つた身体の代わりに義体化している訳ではない。純粹に能力を高めるために、手術を受けた者ばかりだ。

しかし、キッカの心臓だけは違つた。彼女の本当の心臓は、五年前にシズオカ統制区にて反合衆国を掲げる過激派が起こした暴動に巻き込まれた際、合衆国軍兵が誤射した銃弾によって撃ち抜かれ動きを止めてしまったのだ。運び込まれたナショナル・エイド社の研究施設にて、彼女は人工心臓を取りつける手術を受け、一命を取り留めた。

その後彼女は右腕と右脚を戦闘用義体に付け替え、そのまま同社の工作員となつて特殊任務を遂行する日々を送つているのだった。

午前中に報告書の提出を終えたキッカは、社員食堂で昼食を摂つていた。

彼女は余程のことがない限り、一人で行動することが多い。三課の機密事項を漏らさないためといふことも勿論あつたが、それ以上に彼女には他人を寄せ付けるのがアーラがあつた。

切れ長の伏し目、がちな瞳に、すっと通つた鼻筋。少しづつていした唇に、小さな顎。背中までまっすぐ伸びた黒髪はいつも後ろでひとくくりにされており、彼女が身動きする度にさらさらと揺れた。すらりとした長身、長い手足。均整の取れた美しいプロポーション。人目を引く美女ではあるが、多くの者は彼女に対して冷たい印象を抱く。何しろ、極端に表情が乏しいのだ。クールな目元が、彼女を常に不機嫌そうに見せていた。また女性にしてはきつぱりとした言葉遣いも、彼女をより取つつき難く思わせる一因になつていた。

だからキッカに話し掛ける者は、モリノの他には一人くらいしか

いなかつた。

「ここ、空いてるか？」

そう聞くなり返事も聞かずに彼女の正面の席に腰を下ろしたのは、仕立ての良いスーツを着た優男だった。同じ三課の同期、相馬要一朗だ。その瞬間に彼女は、気づかれない程度にその形の良い眉をひそめた。

「お前、昨日の潜入作戦の話、聞いたぞ」

ソウマの声には、若干ではあるが揶揄するような響きがあった。「撤退の時に警備兵に見つかって、待ち伏せされたらしいな」

キッカは返事の代わりに、彼の顔に一瞥をくれた。彼は小馬鹿にしたような目で、彼女のことを見ていた。こいつは性格の悪さが顔に出ている。

「お前、最近気を抜いてるんじゃないか？ 僕だったらそんなへマはしないけどな」

この男は本社採用の、いわゆるエリートだ。キッカとは同期入社でありながら、地元採用の彼女に対して軽んじるような態度を初めから取っていた。ところが入社後まもなく合同で行った任務で、彼女の方が手柄を立てた。彼にはそれが気に入らなかつたらしく、以来何かにつけキッカに絡んでくるのだ。

「何が言いたい？」

キッカは怪訝な表情を作つて、ソウマを睨んだ。それを見た彼は、少し大袈裟にかぶりを振った。

「別に。深い意味なんてないよ」

昨日は任務でミスをして、今日はソウマに嫌味を言われる。まつたく、「冗談じやない。

彼女は相手にするのも馬鹿らしくとばかりに小さく溜め息をつき、席を立つた。

「タチバナ」

立ち去ろうとするキッカの背中に、ソウマの声が掛かった。

「たまには同期同士、飲みでも行こうぜ」

彼女が軽く振り返ると、ソウマの口元にやした笑顔が目に入った。

嫌な男だ。

「……考え方とく」

キッカは視線すら合わせず、冷たい声でそう言った。彼女なりの皮肉だ。当然、彼と飲む気などひとかけらもない。

「相変わらず可憐げのない女だな」

ソウマの馬鹿にしたような声を背中で聞きながら、キッカは苛々と食堂を後にした。

第2話：一日目（1）「メモリー・チップ」

キッカが研究棟への呼び出しを受けたのは、それから一ヶ月後のことだった。

研究棟は、彼女が勤務するシミズ支社ビルのすぐ隣にある。普段は用事がないため、滅多なことでは立ち寄らない建物だ。

「呼び出し」と言つても、課長経由ではない。直接キッカの携帯端末に連絡があったのだ。正式な指令であれば、必ず課長経由で連絡が入る。つまり、今回は正式ルートではない呼び出しということだ。

キッカは研究棟の中の、とある一室の扉を叩いた。

「博士、タチバナです」

中からどうぞという男性の声が聞こえた。

扉を開けて中に入ると、銀縁眼鏡を掛けた白衣姿の中年男性と、モリノがいた。呼び出されたのは自分一人だと思つていたため一瞬驚いたが、キッカは何でもないふうにモリノに対して軽く目礼をして、博士に向き合つた。

「お久しぶりです、川島博士。何かご用でしょうか」

「ああ、一ヶ月ぶりだつたかな。わざわざ出向いてもらつて済まないね、キッカくん。心臓の調子はどうかね」

川島博士は眼鏡の奥の目をわずかに細めた。

彼こそがキッカに人工心臓移植手術を行つた命の恩人であり、また三課の人間に義体化手術を施した人物だつた。命を救つたせいか、彼女に対しては他の者よりも気に掛けているような素振りを見せることがたまにあつた。

「ええ、お陰さまで良い調子です」

キッカは僅かに微笑みを作り、柔らかい声でそう答えた。その表情を見れば、大抵の男はくらりと来るだろつ。周囲から冷たい女だ

と思われていてる彼女であったが、実際はそうではない。ただ、明るく柔らかく振る舞う必要性が極端に限られているだけである。特に社内では。

博士はうんうんと頷いてから、真顔に戻った。

「さて、君たち二人を呼び出したのは、極秘で頼みたいことがあるからだ」

「博士の頼みだったら、何だつてお受けしますよ」

な、とモリノがキッカを見る。彼女は軽く頷いてそれに答えた。その様子を見た博士はひとつ咳払いをしてから、神妙な面持ちで話を始めた。

「これから私が君たちに頼もうとすることは、完全に私の独断によることだ。正直言つて、私の申し出を受けることは、会社を裏切る行為と等しい。恐らく、もうこの会社には戻って来れなくなるだろう」

博士のただならぬ様子に、キッカとモリノは顔を見合せた。

「……つまりそれは、博士自身がこの会社を裏切るということでしょうか」

キッカは落ち着いた声でそう尋ねた。博士は深く頷いた。

「そうだ。本来であれば、私一人で行動を起こすべきなのだが……私の行動は本社から見張られていて、自由に動くことができない。そこで君たちを信頼して、是非ともお願ひしたいことがある。巻き込む形になってしまって、申し訳ないが」

モリノは大きな身体を少し縮めて、促すように博士を見つめた。

「それで、一体どんなことです？」

博士は数秒考え込むように黙っていたが、やがて白衣のポケットから一枚のメモリーチップを取り出し、二人に差し出した。

「この中に入っているデータを、社外に持ち出して欲しい」

二人は困惑した表情で、渡されたチップと博士の顔を交互に見た。「この中には、私の行っている研究の実験データが入っている。これをマスコミに持ち込んで、世間に公表して欲しいのだ」

キッカは思わず口を開いた。

「博士、それは一体……」

「私は本社からの命令で、とある研究を進めてきた。それは君たちも知つての通りだろう。君たちに行つた戦闘用義体の手術もその一環だ。その研究が、一ヶ月程前にキッカくんが入手してきてくれたデータによつて、一応の完成形となつた。しかし

博士は一旦そこで小さく息をついた。そして迷うように数度瞬き

をしてから、ゆっくりと話を再開した。

「私は、人間が踏み込んではいけない領域に足を踏み入れてしまつたのだ。あれは人智を超えた研究だつた。私はそれを自覚しながら、ここまで進んでしまつた。研究者としての自分の性に、心底吐き気がするよ」

彼の顔に、深い後悔の色が浮かぶ。

「一体何があつたんです？ 少なくとも我々は、博士の研究のおかげでこうして効率良く仕事ができています。皆博士に感謝しています。何か事情があるなら、ぜひ教えてください」

モリノが真摯な瞳でそう言つた。しかし、博士は首を横に振つた。「君たちに無理な依頼をしておきながら申し訳ないが、私の研究の中身は このデータの中身は、知らない方がいい。君たちはただ、私に言われて仕方なく、メモリーチップを運ぶだけだ」

つまり最終的に罪をかぶるのは自分で良いと、博士の目が言つていた。二人を巻き込むことに対する、彼なりの最大限の配慮だつた。

キッカは酷く困惑していた。

彼女が任務を遂行してきたのは、命を救つてもらつた恩からだつた。つまり川島博士の力になればと、どんな不法で危険な仕事も行つてきた。

しかし彼女の入手してきたデータのせいで研究は良からぬ完成を遂げ、結果的に博士を深い葛藤の淵へと追い込んでしまつたようだつた。会社を裏切ること自体は然程重大なことではなかつたが、自

分が博士の申し出を受け入れ遂行した結果彼の立場が一体どうなるのかと考えると、容易に返事のできることではなかつた。

「……分かりました。メモリー チップをお預かりしましょう」

返答に詰まるキッカの傍らで、モリノがそう返事をした。彼女は驚いて、思わずモリノの顔を見た。しかしその表情から、彼もまた苦渋の末返事をしたのだと分かつた。

「ありがとう、モリノくん。……申し訳ない」

博士はモリノの右手を両手で握り、心から済まなそうな、しかし強い意思の光を湛えた瞳でそう言つた。キッカはその様子を見て、心が固まるのを感じた。博士も悩んだ末、自分の信念に従つたが故の決断なのだ。何より、キッカのことを信用してくれた。

「博士、私もお受けします。必ずこのデータを、マスコミに持ち込みます」

キッカはしつかりとした口調でそう言つた。川島博士は彼女に向き直り、同じように彼女の手を握つた。

「ありがとうございます、キッカくん。君のことは娘のように思つていた。それをこんな風に巻き込んでしまい、本当に申し訳ない」

にわかに胸に熱いものがこみ上げてくるのを、キッカは感じた。博士に組み込んでもらった借り物の心臓が、とくんと脈を打つた。彼女は唇に微笑みを形作る。

「いいんです、博士。お役に立てるのなら」

博士は何度も一人に礼と謝罪の言葉を言つた。そしてまた元の落ち着いた様子に戻つた。

「しつこいようだが、これは会社の意向に反して、私の独断で行っていることだ。特に本社側の人間に悟られないよう、気をつけて欲しい」

そこで初めてキッカは気づいた。三課の中で地元採用なのは、彼女とモリノの二人だけだ。あの者は皆、本社採用だつた。

「この私からの申し出を受けたことで、君たちに危険が及ぶかもしれない。実験データが持ち出されたことを知つたら、本社は死に物

狂いでそれを回収しに来るだろ？。でも信じて欲しい。君たちは私の……」

何故かそこで、博士は一旦言葉を切った。

「……本当に、研究者というのは嫌な生き物だな。君たちを実験対象と思ったことはないのだが。自然に口をついて出てしまいそうだった。『君たちは私の“最高傑作”だ』とね」

博士は自嘲気味に笑った。

「なあに、我々にとっちゃ、それは最高の褒め言葉ですよ。モリノが豪快に笑う。キッカもつられて笑みをこぼした。にわかに和やかな空気が流れた後、博士が彼らをまた正面から見据えて言った。

「いずれにしても、君たちの無事を心から願っている」

「ええ、博士もご無事で」

「（）から別れて行動した方が良さそうだな」

川島博士の部屋を出た後、モリノがキッカにそう言った。

「手に分かれれば、任務を遂行できる確率は一倍になる。ただし同時に、情報が漏れるリスクも一倍となることも忘れてはならない。しかし、彼らはプロだ。

「そう言えば、俺が個人的に使ってる携帯端末があるんだが……」

モリノはそう言って、ポケットをごそごそと探し出した。取り出したのは、手の中にすっぽり収まるサイズの端末だった。あまり見ない型だ。

「普段は音楽プレーヤーとして使ってるんだが、普通の携帯端末だ。お前にこれを渡しておくから、万一何かあつた時に連絡をくれ。俺も何かあつたら連絡するから、電源入れといてくれよ。一応会社とは関係のない端末だが、会社側がどんなルートで追ってくるか分からぬから、最終手段として考えてくれ」

キッカは端末を受け取り、簡単に使い方のレクチャーを受けた。

彼女は礼を言った。

「お前が優秀なのは良く知ってるが、無茶はするなよ。お前、怪我の治癒スピードは一般人と同じなんだからな」

義体化手術によって人並み外れた頑丈な身体と回復力を持つモノは、念を押すようにそう言つた。キッカは小さく微笑みを作った。「モリノさんも、油断しないでくださいね」

「言つじゃねえか。俺を誰だと思つてんだ」

彼は明るい声で言つた。

「それじゃ、もう会えないかもしれないけど……無事でな」

「……モリノさんも、お気をつけて」

二人は固く握手をした。モリノの手は涼しげにして、そして温かかった。

キッカは研究棟でモリノと別れた後、情報三課の執務室に戻った。早退届を出すためだ。

早退の理由は適当に作った。あまり詳細な進捗報告をせずともきつちりと任務完遂するキッカを信頼しているのか、課長からは特に何も疑われなかつた。

加えて引き出しやデスク周りなどから、貴重品や身分証明になるものを回収し何食わぬ顔で鞄に詰める。恐らくもうここへは戻つてこれないので。

荷物を持ち、パソコン端末をシャットダウンしたのを確認して、席を立つ。スーツの襟を正すふりをして、内ポケットにあるメモリーチップと携帯端末に触れる。それらはそこに入れた時のまま、きちんと収まっていた。

他のメンバーにお疲れ様です、と平坦な声で挨拶をし、部屋を出る。エレベーターホールに続くリノリウムの廊下には、キッカのパンプスのヒールがコツコツと床を叩く音がやけに大きく響く。

そのときだつた。

「おい、タチバナ」

突然背後から声を掛けられ、キツカの心臓は一瞬動きを止めた。ゆっくり振り返ると、今しがた執務室に戻つてきたらしいソウマが立っていた。

「なんだ、出かけるのか。お前、モリノさん見なかつたか？」

「……いや」

キツカは表情を変えずに、短く答えた。

本社側の人間に悟られないように。川島博士の言葉が頭に過つた。「そうか、朝から見かけないんだよな。今日モリノさんは外出の予定だつたか？」

「……さあ、知らない」

事実、モリノがどのようなルートで行動するのかキツカは知らないかった。ソウマは軽く腕を組み、彼女の素っ気ない返答に対して僅かに眉根を寄せた。

「用事はそれだけか？ 私は忙しいんだ」

ソウマが何か突っかかる前に、キツカは淡々と言い放つて踵を返した。何だよ、と彼が小さく文句をこぼすのを後ろに聞きながら、彼女は再び歩みを進めた。幸い、ソウマはそれ以上彼女を深追いしてこなかつた。

エレベーターを待つ間、乗り込んでから一階に着くまでの間、一階ロビーからビルを出るまでの間 キツカはさざめく心臓を身の内に抑えながら、会社の外に出るまでの時間をまるで永遠のように長く感じていた。

少女が朝の買い物を終えて店に戻つてきたのは、午前十一時ごろだった。

ランチの営業は十一時半からなので、ギリギリだ。本当はもっと早く戻るつもりだったのだが、果物屋の女将の世間話につかまってしまったのだ。

「ただいま、マスター。遅くなつてごめんなさい」

少女はカウンターの奥にいるマスターに声を掛けた。エプロンを着けた壯年の男性が、それに笑顔で応える。

「おかげり、ユナ。頼んだものは買つてきてくれたかい？」

「うん、全部買つて来たよ」

ここにはハママツ自治区の端にある小さな喫茶店だ。正確に言えば、昼間は喫茶店なのだが、夜になると酒を出すショットバーに変わる。古い店だが、人を安心させるような落ち着いた雰囲気のある店だ。スラムに隣接した地域のためあまり治安は良くないが、マスターの人柄と美味しい料理のおかげで、この店はいつも常連客で賑わっていた。

「果物屋の奥さんから、気になる話を聞いたの。また、薬の値段が上がるつて」

ユナは買つてきたものをカウンターに並べながら、先ほど仕入れたばかりの情報を披露した。ユナの声を聞いたこの店の女将が、奥から顔を出して口を挟んだ。

「今や薬品業界もナショナル・エイド社の一人勝ちみたいなもんだからねえ。大昔は独占禁止法つてのがあつて、どつか一社が一人勝ちして技術や値段が偏らないように、カルテルとか言つて世間に出来わる品物の量や値段を調整してたみたいだけねえ」

女将は恰幅の良い身を揺らしながら、不満げな声を出した。

「スラムにやいまだに被爆の後遺症でガン患者が溢れてるつていうのに。結局きちんとした医療を受けられるのは、統制区域に住んでる連中だけさね。格差は拡がる一方だよ」

「母さん。早く支度をしないと、ランチの時間が始まつちまつておしゃべりな女将を諭すよつて、マスターは準備始めた。

ユナはこの夫婦の本当の子供ではない。

彼女はうんと小さなころ、コマキ自治区に本当の両親と一緒に暮らしていた。それが十年前に軍からの攻撃を受け、両親と死別してしまつたのだ。それ以来、遠縁にあたるこの夫妻の元で暮らしているのだ。

子供のいなかつた夫妻は、ユナを本当の子供のように可愛がつた。ユナもそれに応えるように、せつせと店の手伝いをした。人見知りせず明るく可愛らしい彼女は、お客の評判も良かつた。生活はそれほど裕福ではなかつたが、健康で幸せに暮らせることを、ユナは心から感謝していた。

十一時半になり、常連客がぽつぽつと来店し始めた。ユナはオーダーを取つたり、出来上がつた料理を運んだりしながら、ある人物が来るのを今か今かと心待ちにしていた。

正午を少し回つたころ、からん、と店の扉を開けて、一人の男性が入つて來た。背の高い、三十歳前後の男だった。

「クオンさん！ いらっしゃい！」

ユナはひときわ明るい声で出迎えた。クオンと呼ばれた男はわずかに微笑むと、カウンター席の端に腰を下ろした。それが彼の定位置だつた。

彼は一年ほど前、ユナがスラム街で柄の悪い連中に絡まれていたところを助けてくれた人物だ。それが縁で、彼はユナの店にちよくちよく来店するようになつた。ランチに來ることもあれば、夜に酒を飲みに來ることもあつた。

彼の素性はよく知らない。分かつてゐるのはハママツ自治区の中に住んでいるということと、用心棒のような仕事をしてゐるということぐらいだつた。精悍な顔立ちだがその表情はいつもどこか陰を湛えており、一見すると話しかけにくい雰囲気を持つた男だ。

しかし、ユナはそんな彼に恋をしていた。本当は優しい人だとうことを知つてゐるからだ。まだ十六歳の彼女からしたら随分と年

上の相手だが、そんなことを気にする彼女ではなかつた。

「クオンさん、また薬の値段が上がるんだって。さつき果物屋さんの奥さんから聞いたの」

ユナは水を出しながら、クオンに声を掛けた。一見寡黙そうじ見える彼だが、話しあげればちゃんと応えてくれる。彼女はいつもちょっとした世間話など話題を作つては、積極的に会話しようとしていた。

クオンは頷いた。

「ああ、それ俺も聞いたよ。ナショナル・エイド社もこよにょ独占的になつてきたな」

「昔は独占禁止法つていう法律があつたんでしょう?」

難しいことはよく分からぬユナであつたが、会話が続けば何でも良い。彼女はついわざと女将が言つていた言葉を口にしてみた。彼は少し感心したような声を漏らした。

「ユナ、難しい言葉を知つてるな。とは言つても、俺もその時代のことは良く知らないんだけどな」

クオンに褒められたことに嬉しくなつたユナは、更に続けた。「クオンさん、お仕事柄怪我をすることもあるんじやない? お薬や包帯が高くなつたら、ほんと困りますよね」

その言葉に、彼はふつと口元を緩めた。

「そうだな、怪我をしないように気をつけなきやな」

ふいに向けられた笑顔に、ユナの心臓は高鳴つた。みるみる頬が紅潮していくのが自分で分かる。普段はどこか暗い表情の多いクオンだが、たまに見せる笑顔がとても素敵なのだ。

しばらくもじもじしていたユナだったが、別の客が彼女を呼ぶ声ではつと我に返り、クオンに一礼してその客の元へ飛んでいった。

その後はランチタイムのピーク時間となり、ユナがクオンに話し掛ける暇はなかつた。しかし彼が会計を済ませて出ていくところを目についた彼女は、彼を追い掛けて店を一歩出た。まだほんの十メー

トルほど先の彼の背中に、彼女は声を掛けた。

「クオンさん！ 今度はいつ来るの？」

ユナの声に気づいた彼は、ゆっくりと店を振り返った。

「そうだな。今日は仕事が早く上がる予定だからな。また今夜来るよ」

軽く右手を上げて去つていいくクオンの広い背中を見つめながら、ユナは飛び上りたい衝動を抑えるのに必死だった。今日はなんてラッキーーデーだろう。彼女は軽い足取りで、仕事に戻つていった。

第3話・一四三(2)「ハママツ自治区へ」

キッカは会社のビルを出た後、シズオカ統制区内にある自宅アパートへと帰宅した。着替えと武器を準備するためだ。スーツにパンプス、丸腰状態では、さすがの彼女でも何かあつた時に分が悪いだろう。

彼女は寝室のクローゼットを開けた。中には出勤の際に着るパンツスーツが何組かに加え、今までの作戦で使ったボディースーツや潜入捜査の折に着用した華やかなドレスもあつた。一瞬これまで遂行してきた任務のことや、その時に抱いていた自分なりの真摯な想いが胸を過つたが、すぐかき消した。

彼女はたくさんの衣装の中からベージュのタートルネックの半袖ニットと濃紺のスキニージーンズを選び、すばやく着替えた。ショルダーホルスターに愛銃を挿し、上からショート丈の黒いトレーナーを羽織つた。足元は窮屈なパンプスから、使い込まれたエンジニアブーツへと履き替えた。ボストンバッグには予備の銃弾や組み立て式のライフルを詰め込んだ。そして川島博士から預かつたメモリーチップやモリノにもらつた携帯端末は、ウエストポーチに大事にしまつた。

身支度が済むとキッカは家を出て、統制区内のレンタカー屋に向かつた。マスコミにデータを持ち込むとなると、自治区域に行く必要があつた。統制区内では、どこでどう握り潰されてしまうか分からぬからだ。

ここから一番近い自治区は、ハママツだ。

核が落とされて以降、鉄道は物資運搬のための機関になつており、一般人が移動手段として利用することはできなかつた。キッカには

社有車があつたが、そこから足がついてもつまらないので、レンタカーで移動することにしたのだ。

レンタカー屋で渡された申込用紙の氏名欄に、キッカは左手で「山野領子」と書き込んだ。左手での筆記は、右手を義務化したばかりで自由に使えなかつた時に習得したものだ。そして山野領子名義の運転免許証を添えて店員に渡した。以前、潜入捜査の時に使つた偽造免許証だ。会社から支給されたものなので依然としてここから足がつく可能性はあるが、彼女の本物の免許証を出すよりはいくらかましだろう。

「ご旅行ですか？」

レンタカー屋の店員は、キッカにそう尋ねた。この物騒な世の中、若い女性が一人でレンタカーを借り遠出することに違和感を感じたのかもしれない。

「親戚がナゴヤ統制区にいるんです」

キッカはあらかじめ用意していた嘘をさらりと言つた。こんなとこで足止めをくらう訳にはいかない。なおも釈然としない表情で彼女を見つめる店員に対して、彼女はにこりと微笑んで見せた。すると彼は途端に顔を赤くし、それ以上何も追及して来なかつた。簡単なものである。

こうして彼女は無事に、若い女性が好んで乗るような当たり障りのないコンパクトカーを借り、ハママツへ向けて出発した。

キッカは国道一号线を快調に飛ばしていた。

かつて非常に交通量の多かつたといふこの道は、今や閑散としていた。申し訳程度に残っている信号機も、ずっと黄色点滅のままだ。人々は、基本的に自分の住む区域内から出ない。どの区域にも属さず、人の住まなくなつてしまつた地域では、車はおろか人間の姿を見ることがほとんどくなつてしまつたのだ。

旧静岡市内をしばらく行くと、『藤枝市』と書かれた看板に出会う。適当なところで休憩を挟みながら旧島田市も抜けて進んで行くと、やがて旧掛川市内に入った。この調子なら、日が沈む前にハママツ自治区へ着くことだろう。

旧磐田市に差し掛かつたころ、キッカはバックミラーに小さく映る黒い車にふと気づいた。

それ以降、キッカがスピードを上げようとも休憩のために停車しようと、その車は彼女の車からつかず離れずの距離を保っていた。それで彼女は確信した。

尾行されている。

まずいな、もう本社側に気づかれたのか。

一体どのタイミングでばれたのか。キッカは記憶を辿った。レンタカー屋では抜かりなくやつたつもりだ。会社から昼過ぎに帰宅したことに関しても、彼女の課の特性上早退することもよくあるので、然程不自然でもないはずだ。

だとしたら、研究棟での川島博士との会話から既に盗聴されたのだろうか。そうなればモリノの身も危ないかもしない。一瞬、もらつた携帯端末でモリノに連絡を取ることを考えた。だが仮に彼がまだ本社側に見つかっていなかつたとして、彼女の送つた電波によつて足がついてしまう可能性を考え、やめておいた。いずれにしても今しなければいけないことは、尾行を撒くことだ。

キッカは一号線から旧市街地へ続く脇道に入つた。無人となつた街は、目眩ましにはちよどいい。多少暴れたつて犠牲者も出ない。くねくねと建物の間を縫うように車を走らせると、やがて変電所跡に行き着いた。敵を待ち構えるのに良さそうだ。

キッカは車を停め、武器の入つたボストンバッグを手に、無人の変電所の塀を乗り越えた。

尾行の車がキッカの乗り捨てた車に追いついたのは、その数分後のことだった。黒い車の中から三人の男が出てきて、そのうちの人がキッカの車の中を確認した。車が既にもぬけの殻であることが分かると、三人は銃を構えながら辺りを警戒するようにきょろきよろした。

たつた三人で来るとは、私も舐められたものだな。

キッカは変電所の鉄塔の上、彼らの死角となる場所からその様子を伺っていた。手には手早く組み立てたライフルが握られている。彼女はスコープを覗き、彼らのうちの一人に狙いを定めた。

激しい衝撃と共に発射された弾は、変電所の鉄塔の間を縫つて人の男の左肩口を撃ち抜いた。

彼女は小さく舌打ちした。足場が悪く狙いが安定しにくいことと障害物が多いせいか、一撃で仕留め損ねたのだ。撃たれた男はその場に蹲り、それ以外の二人は銃弾がどこから飛んできたか確認しようと必死で辺りを伺っている。

キッカは手早く銃弾を装填し、蹲る男を再度狙撃した。再びライフルのしんがりを当てた右肩に反動の衝撃を受ける。今度は男の頭部に命中したが、二発目の銃撃が残りの一人に彼女の位置を教えることになった。

彼女は鉄塔から飛び降り、ライフルを捨ててコートの下からハンドガンを抜いた。

キッカを追つて来た者たちは、さすがに素人ではなかつた。

彼らは一手に分かれ、彼女を挟み討ちするようにじわじわと距離を詰めていった。彼女が移動する度に銃弾が発射される。しかし幸いなことに、その多くが乱立する鉄塔に邪魔をされ、彼女には当たらなかつた。この場所を選んだ彼女の判断は正しかつたと言えるだろうが、弾が当たらないのは彼女も同じことだつた。

こうなれば、接近戦に持ち込んで一気に片を着けた方が良さそうだ。

キッカは彼らの死角を選んで鉄塔の間をそろりそろりと抜け、一人の男に接近した。

男が彼女に気づき、構えた銃を発射するより一瞬早く、彼女は勢いをつけた右膝蹴りを男の顔に叩き込んだ。戦闘用に強化された彼女の右脚の膝は、着地と同時にあつさりと彼の顔面にめり込んだ。態勢を立て直す間もなく、一発の銃弾が彼女の右腕をかすめる。見ると、もう一人の男が彼女に向かつて銃を構えていた。彼女は咄嗟に建物の陰へと飛び込み、「発三発と撃ち込まれる銃弾を避けた。弾がかすめた右の二の腕はコートが焦げ、かすり傷となって僅かに出血していた。しかし今それを気にしている暇はない。キッカは物陰に隠れながら、徐々に相手が接近してくる気配を感じていた。チャンスは一度きりだ。彼女は足元に落ちていた石を拾い、彼の視界に入るよう投げた。

案の定、彼は転がる石に向かつて反射的に発砲した。

彼がそれを判断間違いだと認識した時にはもう手遅れだった。その僅かな隙をついたキッカは、物陰から彼の頭部に狙いを定めて引き金を引いた。銃弾は男の眉間に撃ち抜き、彼が倒れたところに大きな血だまりができる。

絶命した男の手から離れた拳銃が、キッカの足元に転がって来た。その銃は、合衆国軍で採用されている型と同じものだつた。

ナショナル・エイド社と合衆国軍のつながりが深いことはキッカも知っていたが、川島博士の実験データを奪い返すために軍が動いているということに、彼女は驚きを隠せなかつた。つまりこのデータは、合衆国軍の機密と深く関わっているということだ。博士は「本社からの命令で研究を進めていた」と言つていたが、本社は合衆国軍と共に謀して何か良からぬ計画を進めているのかもしれない。

背中を、冷たい汗が伝つていくを感じた。ひょつとして自分はとんでもないことに巻き込まれているのではないだろうか。自治区に入る前からこんなことにならうとは、はたして無事にデータをマスクミに持ち込めるのか。にわかに、一抹の不安が過つた。

しかしネガティブな思考は任務に悪影響であることを、彼女はこれまでの経験上嫌というほど分かつていた。リスクを認識した上で、それをうまく避けることを考えるべきだ。幸いなことに、ハママツ自治区はもう歩いて行ける距離だ。

キッカはとりあえず、途中で投げ捨てたライフルを拾いに行つた。これもまだ必要な時があるかもしない。組み立てた時と同じように手早くそれを分解し、傍に落ちていたボストンバッグにしまった。彼女がバッグを手に、立ち上がろうとしたその時だった。

銃声と共に、左肩に強烈な衝撃が走つた。

一瞬遅れて、燃えるような痛みが来る。

驚いて反射的に振り返ると、膝蹴りで顔を潰された男が、半身を起した状態で彼女に銃口を向けていた。彼女は咄嗟にハンドガンで彼の頭部を撃ち抜き、今度は確實に絶命させた。

キッカは膝蹴りで倒した男の生死をきちんと確認しなかったことを、激しく後悔した。「お前、最近気を抜いてるんじゃないか?」というソウマの言葉が頭をかすめて、更に苦々しい気分になつた。彼の言ったことはあながち間違つていなかつたのかもしれない。

「くそ……」

左肩の銃創からは、とめどなく血が流れている。銃弾は貫通しているようだが、早く止血しないと致命傷になりかねない。ボストンバッグの中に多少の包帯は入っていたが、動脈をかすめたのか出血は簡単には止まりそうになかつた。

お前、怪我の治療スピードは一般人と同じなんだからな。別れ際に聞いたモリノの声が、聞こえた気がした。

とにかく、自治区内の病院を探そう。

大量の出血で徐々に朦朧とする意識の中、キッカはハママツ自治区の中に足を踏み入れた。

ユナは夕暮れの街を、軽い足取りで店に向かっていた。

夕方の買い出しは酒のつまみになるようなものが多いので、昼の買い出しそり荷物が軽い。しかし、この今にも踊り出しそうな足取りは、荷物の軽さのせいではなかつた。クオンが夜も店に来る。たつたそれだけのこととて、世の中の不幸が全て吹き飛んでしまつたかのように幸せだつた。スラムに程近い薄汚れた街だが、夕焼けに染まつて美しく見えた。

「あらミーちゃん、あなたもお散歩？」

足元を顔見知りの黒猫がすり抜けていつた。猫は一瞬立ち止まり、にやあと一声返事をする。

「今日はねえ、あたしラッキーティーなの。今日これからまたびきり良いことがあるんだよ」

ユナは弾んだ声でミーに話し掛けたが、猫は素知らぬ顔ですたすたと路地に入つて行つてしまつた。

「あっ、待つてよお！」

彼女は慌てて猫を追いかけ、細い路地に入つた。路地裏は「ゴミ溜め」のようになつていて、そこが多いため、普段の彼女だつたら決して踏み込んだりしないのだが、今日は異常とも言えるハイテンションがそれを忘れさせた。猫でも誰でも、この幸せを分けてあげたい気持ちでいっぱいだつたのだ。

「ミーちゃん？　どこ行つちゃつたの？」

一刻一刻と沈む夕日に、黒猫の体は路地裏の闇に溶けて見えなくなつてしまつた。

「もう、いつもすぐいなくなつちゃうんだから。もういいよ」

ユナが踵を返して元の道に戻ろうとした一瞬、視界の端に何か動くものが見えた。さつき一度は見失つた黒猫だつた。猫は枝分かれした路地の交差点にあたる部分に腰をおろし、また一声にやあと鳴いた。その様子に違和感を覚えた彼女は、猫のいる方へゆっくり歩

いて行つた。

すると今まで彼女の死角になつていた路地の角に、何かブーツのようなものが落ちているのが見えた。猫はまさにその場所を彼女に示しているのだ。

足 ?

彼女は恐る恐る近づき、角を覗きこんだ。
するとそこには、人間が倒れていた。

きやあ、とユナは口の中で悲鳴を上げた。死体ではないかと、一瞬思ったのだ。しかしよく見ると、その人物はせいぜいと荒く呼吸をしていた。右手で左肩口を押さえて蹲るような格好で、苦しそうに小さな呻き声を上げている。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

明らかに大丈夫ではなさそうだったが、他に何と声を掛けて良いのか分からなかつた。長く束ねた髪や身体の細さから、女性のようだ。

「肩、怪我してるんですか？」

ユナは女の身体を少し振り動かすようにして顔を覗き込む。しかしその瞬間、はつと息を飲んだ。今まで陰になつていてよく見えなかつたが、辺り一面が血だまりになつているのだ。

「あ、あの、あたしすぐに助けを呼んできます！だからもう少し頑張つて！」

言つなり、彼女は走り出した。

「ねえ大変！ そこの路地で女人人が倒れてるの！」

店の扉を開けて開口一番、ユナは叫んだ。

全力で駆け抜けてきたせいで激しく息が上がつていた。店内にはマスターと、既に来店していたクオンの姿があつた。あれほど心待ちにしていた彼の姿だったが、今はそれどころではない。

「肩から血をたくさん流して……早く来て！」

ユナはマスターとクオンを連れて、再び女の倒れている路地へと駆けつけた。

その女は先ほどと同じ格好のまま倒れていたが、気のせいか少し呼吸が浅くなっていた。

彼女の傍に膝をついて様子を見たクオンが、マスターを見上げて言った。

「これはまずいな。マスター、救急車を

「ああ、分かつた」

マスターはポケットから携帯端末を取り出し、電話を掛け始めた。クオンは女を軽々と抱え上げ、少し広い場所へと移動させた。そして自分のウエストポーチから布のよつなものを取り出すと、それを長く引き裂いた。救急車が到着するまでの応急処置だ。傷は比較的心臓に近い場所なので、少しでも早い止血が生死の分かれ目となる。幸い、傷を受けてからそれほど時間は経過していないようだ。

ユナは彼女が倒れていたすぐ傍に置いてあつたボストンバッグを持ち上げようとした。しかしそれは、見た目に反してずしりと重かつた。

「ねえ、これ何？」

ユナがボストンバッグの中身を覗きこんで声を上げると、クオンが女の上着を脱がせ、彼女が若い女性には似つかわしくないショルダーホルスターを装備しているのを見つけるのと、ほぼ同時だった。

ホルスターには使い込まれたハンドガンが差し込まれており、バッグの中には組み立て式ライフルと銃弾箱が入っていた。

「ちょっと訳ありのお客さんのようなだな

クオンは独り言のように呟き、女の肩に布を巻いて止血をしながら、救急車の到着を待つた。

第4話・1 日田（1）「不可解な奇襲」

目覚めて真っ先に視界に入つたのは、見知らぬ白い天井だつた。キツカははつきりしない頭で、義体化手術から覚醒した時のこと思い出していた。コールドスリープから解凍された身体が、再び巡り始めた血潮で徐々に感覚を取り戻していくのだ。あの時ほどの不思議な目覚めを、彼女は経験したことがない。ただ冷凍睡眠していたというより、一度死んで生き返つたかのような気分だつたのだ。そのままぼんやりと宙を仰いでいると、横からハイトーンの声が聞こえた。

「あ……良かつた、気がついたみたい」

声のした方に重たい頭を動かすと、少女の白い顔が目に入った。

「気分はどうですか？ 肩、急いで処置してもらつたんですけど…」

ショートボブの髪の、くくりとした瞳の丸顔の少女だつた。細い身体にワンピースのような形のエプロンを身に着けている。

キツカは状況が飲み込めず、ぱちぱちと瞬きして少女の顔を見つめた。頭はぼんやりしているが、どう考へても見知らぬ顔だつた。

「あ、あたし、高邑由奈つていいます。お姉さん、路地裏で血を流して倒れてたから、あたしひくりしちやつた。ここは病院で、肩の傷は縫つてもらつたよ。お姉さん、あれから丸一日くらい眠つた」

ユナの言葉にみるみる現実に引き戻されたキツカは、背筋に冷たいものが走るのを感じた。直近自分の身に降りかかった出来事が、さまざまと思い出される。彼女は慌てて、無事な右手でウエストポーチをしていた腰の辺りを探つた。

ない。

「あ、お姉さんのポーチ、横に置いてます。中のものは触つてない

よ

ユナが促した方へ視線を向けると、確かにキッカが身に着けていたウエストポーチがきちんと置かれていた。右手で手繩つて、中を確認する。メモリーチップと携帯端末は入れた時のままだった。彼女はほつと安堵して、小さく息をついた。

「お水、飲みますか？」

少女の華奢な腕がベッドを操作し、キッカは身を起こした。ユナが差し出した水の入った紙コップを、右手で受け取る。

「ありがとう」

久々に発した声は少し擦れていたが、それを聞いたユナははにかんだように笑みをこぼした。可愛い子だ。

キッカは少し辺りを見回し、それから自分の身体を確認した。負傷した左肩口と右の一の腕には丁寧に包帯が巻かれている。そして服は真新しいタンクトップに変わっていた。きっと誰かが血で汚れた服を着替えさせてくれたのだろう。麻酔の切れかけた傷口がじわじわと痛んだが、我慢できないほどではない。

キッカはユナに尋ねた。

「私はハママツ自治区を目指して来たんだけど……ここはもう自治区の中なのか？」

「うん、自治区内の病院だよ」

「良かつた、ここはハママツなんだな……」

ユナは相槌を打ちながらも、キッカの顔をまじまじと見つめていた。キッカがその視線に気づいて軽く首を傾げると、ユナは何故か少し恥ずかしそうに視線を逸らした。

ここに辿り着く直前の出来事を思い出せば、胸を撫で下ろさずにはいられなかつた。キッカは顔を持ち上げて、ユナに向き直つた。

「私は橘菊花。ユナさん、助けてくれてありがとう」

キッカは僅かに笑みを作り、座つたままの状態で少し首をもたげた。ふいに名前を呼ばれ、ユナはほつと火がついたように赤面した。

「いいの、全然！ あたしは人を呼びに行つただけで、ほんとに大

したことなんてしていないんだから…」

少女の慌てた様子に、キッカは頬を緩めた。

「あつ……そう言えば………」

突然、ユナが思い出したように声を上げた。そしてキッカの耳に顔を寄せ、内緒話するように小声で言った。

「キッカさんの荷物、うちで預かってます」

ユナに案内された先は、古めかしい喫茶店のような店だった。

白いタイルの外壁は煤けたような色に変色していた。通りに面した窓もくぐもつていて、小さな手書きの立て看板が出ているだけの小さな店だ。夕方の四時だった。店のドアには『CLOSE』の札が掛っている。

「あらあ！ こりゃえらい別嬪さんを連れて來たねえ」

店の中に入るなり、女将とおぼしき恰幅の良い中年女性が声を上げた。

中は外観と比べればまだ新しかつたが、全体的に古びた雰囲気だつた。しかし不思議と暗さはなく、包み込むような温かい空気に満ちていた。「一ヒー豆の良い香りがする。

店内にはその女性とマスターらしき中年男性、それとカウンター席の端に一人の青年が座っていた。キッカはその青年が、ここへ来るまでの道すがらユナから聞いた、昨日自分を介抱してくれた人物だろうと思った。彼女は店の中の三人に向かつて、軽く頭を下げた。

「もう大丈夫なのかい？」

マスターがキッカに向かつて声を掛けた。キッカは軽く微笑みを作った。

「ええ、お陰さまで。本当にありがとうございました」

「とりあえずキッカさん、座つて座つて。立ち話もなんでしょう？」
ユナに促され、キッカは青年の隣に腰を下ろした。ユナはぱたぱたとカウンターの向こう側へ入つて行った。

「君の荷物、預かつてるよ」

隣の男がいきなりそう声を掛けってきた。そしてキッカにショルダーホルスターとボストンバッグを手渡す。彼は当然中身を知つてゐるはずだが、特に訝しむような様子はなかつた。彼女もそれに調子を合わせる。

「ユナさんに聞きました、ありがとうございます。あと、昨日助けてくれたことも」

男はそんなこと何でもないと笑つように、小さく肩をすくめて見せた。そこで一旦彼との会話は途切れ、ユナがコーヒーを運んでくるまで沈黙が続いた。キッカはコーヒーを一口飲む。香ばしい香りが鼻腔をすり抜けた。

沈黙を破つたのは、再び出し抜けに口を開いた彼の方だった。

「君は……何者なんだ？」

「ちょっとクオンさん！　いきなり失礼だよ」

ユナに叱られ、クオンと呼ばれた男は小さくすまん、と言つた。
「俺はクオン。この街で用心棒だとか用聞きだとかの仕事をしている。まあ、なんでも屋みみたいなもんだな。仕事柄武器を使うこともあるが、危ない橋は渡つていなければなりなんで安心してほしい。つまり、そういうことを聞きたいんだ」

やはり、キッカが銃器を所持していることに對して懸念があるようだ。

キッカは一瞬躊躇つた。下手に真実を話して、この善良な無関係の人たちを巻き添えにしてしまうことだけは避けたかった。しかしデータを信用できる場所に持ち込むために、情報をもらう必要もある。とりあえず簡単に、タチバナです、と名乗つた。

「訳あって詳しい事情は話せないんですが……私はあるデータをマスコミに持ち込んで世間に公表するために、シズオカ統制区から來ました。その途中でデータを狙う追手に襲われて。それはどうにか倒したんですが、私も傷を受けてしまつて。動けなくなつているところを、あなた方に助けられた」

「……なるほど」

クオンは全く納得していないような表情でそう言ったが、特にそれ以上追及することもなかつた。誰だつて面倒には巻き込まれたくないだろ？

「この街に新聞社かテレビ局はありませんか？ 場所を教えていただくだけで結構です」

キッカはカウンター越しに、マスターと女将に問い合わせた。場所だけ聞いて、早々に店を立ち去るつもりだった。またいつ追手ができるか分からぬからだ。

壮年の夫婦は少し困ったように顔を見合させていたが、やがてマスターが口を開いた。

「新聞社なら、あるにはあるが……報道規制が厳しくてね、正面からじやともじやないけど入れてもらえないよ」

「毎日来てる新聞もね、全部内容を政府に規制されてるんだよ。向こうさんにとって都合のいい情報しか、世間に流れないようになってんのさ」

夫の後に妻が言葉を繋いだ。キッカは食い下がる。

「雑誌や本の出版社でもいいんです」

「そういうとこも全部同じさ。出版系やテレビも全部向こうさんに仕切られてるんだよ」

「ここは自治区域なのに？」

驚いたようなキッカの言葉に、夫妻の表情は曇つた。そこへユナがもう慣れっここといつた調子で口を挟む。

「インターネットの制限も激しいしね。なんだかんだで、あたしたちは管理されてるんだよ。『自治』なんて名ばかり」

「せつ……」

明るかつた店内が、一瞬しんとなつた。自分の発言でそのような空気になってしまったことに対し、キッカは若干の屈辱を感じた。ともあれ、データを公表できそうな先を見つけることが当面の課題のようだ。

「この街の状況はよく分かりました。自分でなんとか探してみます。いろいろありがとうございました、本当に助かりました」

キッカは席を立ち、店を出ようとすると、すると女将が慌ててそれを制した。

「もう行っちゃうのかい？ もう少し休んで行きなよ」

「そうだよ！ キッカさん、お腹空いてるでしょ？ うちのBLT

サンドは絶品だよ。ぜひ食べてつて」

ユナがそう言いながら、キッカの皿の前にサンドイッチの載った皿を置いた。

「酷い怪我して、大変だったんだろ？ たんと食べておくれよ」

女将が先ほどのことなど何でもなかつたかのように、屈託のない表情で言つ。

キッカは彼女らの勢いに押され、再び席に着いた。そして勧められるままにサンドイッチを一口齧る。

さつくりとしたトーストの歯ごたえに続いて、レタスとトマトの瑞々しさが口の中に拡がつた。ずっと緊張状態が続いていたため意識していなかつたが、食べ物を口にした途端に胃袋が急激に空腹を訴え出すのが分かつた。

キッカは皿に盛られた八切れをあつという間に口に運び、後から追加で出された八切れもすぐさま食べ尽くした。女将が手早く皿に盛つたサラダも、彼女はペロリと平らげた。サイドに出されたポタージュスープも、彼女はふうふうと冷ましながらあつという間に飲み干した。

「あの、ホットケーキも焼いたけど」

「いただきます」

続けて出された一枚重ねのホットケーキに、たっぷりとメープルシロップを掛ける。それも一瞬で皿の上から消えた。

「……ごちそうまででした」

キッカはきつちりと合唱し、眞面目な口調でそう言つた。それで彼女の見事な食事風景に茫然と見入っていた一同は、その一言に

全員同時に吹き出した。

「すつごおい！ こんなにもりもり食べる女人初めて見た！」

「そんなに食べてもらえると、作った甲斐があつたつてもんさね」

「気持ちのいい食べっぷりだなあ」

口々に賞賛する一同に、キッカはきょとんとした。人より食欲旺盛である自覚はあつたが、ここまで反応を呼ぶとは思つてもいかつたのだ。一同の様子に目を細めていたクオンも、軽く肩をすくめて微笑んで見せた。

キッカは自分がこのよつたな和やかな雰囲気の人々に囲まれていることに、不思議な気持ちになつていた。

右腕と右脚を義体化して以降、平穏とは無縁の生活を送つて来た。法に反する任務や倫理に悖る行為を余儀なくされ、心を殺して与えられた役目を淡々と正確に果たすことこそが自分の存在価値を証明するただ一つの方法だと自分に言い聞かせた。何しろ自分で選び取つた道だ。厳しい環境に身を置き続けた結果、今では人の命を奪うことすら何とも思わなくなつてしまつた。

しかしこうして温かい人の輪に囲まれていると、自分もかつて無条件に手にしていた温かさを思い出さずにはいられなかつた。五年前に突然壊れてしまつた彼女の居場所。失われてしまつた大切な家族。もう一度と戻らない、愛すべき平凡な日々。殺したはずの心が、きゅっと締め付けられるように苦しくなる。

キッカは慌てて、大切な任務のことを思い出した。逃げてはいけない。忘れてはいけない。川島博士と、モリノと約束したのだから。「本当に、何から何までありがとうございました。ごはん、とても美味しかつた。でももう、私は行かなくては。さつき申し上げたように、私は追われている身です。あなた方にまで危険が及んではいけない。お世話になつたことは忘れません」

その気持ちは本当だつた。しかしのんびりしている暇はない。戦

士に休息はないのだ。

席を立つキッカに、ユナが名残惜しそうにする。

「お仕事が終わったら、またお店に寄つてね。絶対だよ」

「分かつた、約束するよ」

早々に役目を果たし、またこの店でコーヒーを飲もう。それくらいの平穏は許されても良いはずだ。

キッカはホルスターを装備した上からコートを羽織り、ライフルの入ったボストンバッグを持ち上げた。お別れの時間だ。彼女は最後にもう一度頭を下げ、店の扉のノブに手を掛けた。

しかし、その時。

ぱりん、とガラスの割れる音と共に、店内に煙が充満した。

煙の中から、ユナの小さな悲鳴やマスターの「火事か?」という声が聞こえる。

キッカは瞬間に身を緊張させた。もちろんこれは火事ではない。煙が目に入った瞬間に刺激が走り、彼女は思わず目をつぶった。店内に煙幕弾が投げ込まれたのだ。間違いなく、彼女を追つてきた刺客の仕業だろう。

一人であればすぐに扉を開けて外へ逃げ出すこともできる。しかし店内にはつい今の今まで世話になっていた人々がいるのだ。それを放つて一人で逃げる訳にはいかない。ぼやけた視界の向こうから、彼らの悲鳴が聞こえる。キッカはつづく自分の甘さに腹が立つた。やはり早々に立ち去るべきだったのだ。

彼女はとりあえず店の入り口の扉を開け放ち、身を低くした。幸いこの空間の端にいたため、それほど煙幕ガスの影響を受けてはいなかつた。

そのまま匍匐前進のまま店の中央へと進む。そして意識を集中させ、敵の攻撃を警戒する。

店内には四名の足音や声の他に、明らかに異質なもののが存在があ

つた。具体的に足音や話し声がする訳ではない。空氣を伝つてくる、言葉では説明できない何か。殺氣、とでも言えばいいのだろうか。ひたひたと迫つてくるような、全身を刺すようなそれを、キッカは肌で感じ取つていた。

およそ、三人。

キッカは来たるべき攻撃に身を構えた。

ひゅつ、とごくわずかに空氣を裂くような音が聞こえたその瞬間、キッカは身を翻して仰向けになり、反射的に右手で何かを掴んだ。それは人間の腕で、その手にはサバイバルナイフが握られていた。刃の切つ先は、彼女の顔面まであとほんの数センチのところで動きを止めている。その向こう側に、この街に入る直前に彼女を襲つた男たちと同じ格好をした黒ずくめの男の姿が見えた。

キッカは左手でナイフをもぎ取り、右手で相手の腕を握り潰した。ぼきぼきという骨の折れる音がし、男は声にならない声を上げる。

痛みに悶えて彼女の身体の上にどさりと落ちてきた男の身体を、彼女は思い切り右脚で蹴り上げた。只でさえ義体化し人外の破壊力を持つ彼女の右膝は、その男の股間にクリーンヒットした。多分もう使い物にならないだろう。

彼女は力を失くした男の首を抱きしめるような格好をしたかと思うと、そのまま力を込めて頸椎を碎いた。胸元にごきりという鈍い音が響く。彼女は男の身体を払いのけ、身を起こす。扉を開け放つたおかげか、徐々にガスは薄れてきていた。

薄くなつた煙を切り裂いて、一番手の男がキッカに向かつて突進してくるのが見えた。彼女はこれも難なくかわし、大振りでできた大きな隙について懷に飛び込む。そして相手の勢いを利用して鋭く背負い投げを決めた。

背負い投げ程度であれば、義体の力を借りずとも可能だ。力任せに拳を振るつてくるようなタイプは振りが大きく隙ができるやすい。柔道や合気道などを、彼女は基礎的に習得していた。

脳震盪を起こして気絶したその大柄な男の腕を掴むと、キッカはその身体を右手一本で持ち上げて、少し離れたところからこちらに銃を向け今にも引き金を引こうとしていた最後の男に向かつて、放り投げた。

銃口から放たれた銃弾は、宙を舞う男の心臓をやすやすと貫く。そしてそれがキッカのもとに届く瞬間、彼女は右足首をぐつとしならせ、その反動で高く舞い上がった。

常人では考えられない滞空時間で天井すれすれに決めたムーンサルトは美しい弧を描き、発砲した男のすぐ手前に着地した。投げられた仲間の身体で目隠しとなつて、男には彼女が突然目の前に降ってきたように見えただろう。

彼女はすぐさま、今度は生身の左脚をクツショーンに勢いをつけ、右脚で男の頭部を蹴り抜く。男の体は圧倒的な力で跳ね飛ばされ、店の窓を突き破つて錐探ししながら店外へ吹っ飛んで行つた。インパクトの瞬間に鈍い音がしたので、恐らく頸椎が折れたのだろう。彼女の足元に転がっている拳銃は、やはり昨日襲つてきた男と同じ型のものだつた。合衆国軍には、三人一組で行動しろといつるルルでもあるのだろうか。

すっかり煙の消えた店内に、再び静けさが戻る。

氣づくと店のほぼ中央に立つキッカを、カウンターの奥にへばりつくように身を潜めていた夫妻とユナが怯えたような目で見つめていた。彼女の常人ならぬ力を見れば、無理からぬことだ。恐らく彼らの目には化け物のように映つただろう。

クオンはカウンターの前辺りで、彼らを守るように立つていた。彼の目には怯えた色はなかつたが、しかしやはり茫然と彼女を見つめているのだった。

つい先ほどまで温かさに包まれてほつとしていた心が、今度は驚くほど底冷えするような闇に飲まれていく。

もう、立ち去つた方がいい。

キッカは無言のまま、そつとカウンターの何枚かの紙幣を置いた。店を壊してしまったせめてもの償いだ。そして店の入り口へと歩み、置いていたボストンバッグを持ち上げた。彼女は最後にもう一度だけ頭を下げ、静かに店を後にした。

外へ出ると、既に夕暮れ時となっていた。見事な夕焼け空も、今は何の感銘もキッカの心に与えない。それどころか、抑えられない不安が彼女の心中にもくもくと湧き出していた。

何故、彼女があの店にいることが分かったのだろう？

それは無視できない問題だった。

念のため持ち物を検めてみたが、発信器らしきものはどこにも見当たらない。気づかぬうちに尾行されていたのだろうか。もし彼女の居場所が彼らにばれていたのだとしたら、片時も気を抜けないといつことになる。次の刺客がすぐ来ないとも限らない。恐らくゆっくり眠る時間もないだろう。

一刻も早く、川島博士から預かつたデータを公表しなくてはならない。

第5話・1 四四(2)「邂逅」

ユナは、キッカが立ち去った店内を茫然と見つめていた。突然襲ってきた男たちの身体はまだ店内に転がっている。クオンが一人ひとりの脈を確かめ、その度に小さく首を振った。恐らく、死んでいるということなのだろう。

目の前で繰り広げられたのは、夢ではないかと疑うほど信じがたい光景だった。つい先ほどまでこのカウンターに座つてうまそうにサンディッシュやらホットケーキやらを食べていた細身の女が、軽々と宙を舞いあつという間に三人の大男を倒したのだ。その動きは明らかに普通の人間のものとは一線を画していた。恐怖よりも、ただ信じられないという気持ちが勝っていた。

やがてマスターが自警団に電話を掛け始めた。この街に警察はない。警察をはじめとする各種行政機関は全て統制区に所属しているため、自治区域ではそういうことも全て自分たちの手で行わなくてはいけないのだ。

ユナはカウンターに置かれた数枚の紙幣に目を落とす。最後に頭を下げるキッカの酷く哀しそうな瞳を思い出し、彼女はぐっと心臓が締め付けられた。あの時キッカは、一体どんな気持ちでお金を置いていったのだろう。

店の損傷具合や男たちが持っていた武器を調べていたクオンが、ふと思い立つたように立ち上がった。

「すいませんマスター、少し確認したいことがありますので、ちょっと出でます」

彼は短くそう言つと、店の扉を開けて出でていってしまった。キッカを追いかけるのだろうか。

ユナは思わず、クオンにつられて外へ飛び出した。後ろから女将が彼女を呼ぶ声が聞こえたが、構わず彼の後を追つて走り出す。何故かは分からぬが、キッカとあんな別れ方のまま一度と会えなく

なつてしまつたら、とたつもなく後悔するよつな気がしたのだ。

キッカは新たな敵の襲撃を警戒しながら、当所もなくハママツ自治区内を歩いていた。

途中、自警団と思しき一団が彼女の歩いてきた方へ走つて行くのとすれ違つた。恐らく、あの店へ向かうところなのだ。また、心がちくりと音を立てた。

「待つてくれ！」

突然、後ろから声を掛けられた。

思わず立ち止まつて振り向くと、クオンが立つていた。走つて来たのか、僅かに呼吸が上がつてゐる。キッカは訳が分からなかつた。あれだけの光景を目にして、彼女を追つてくる者がいようとは。

「君に聞きたいことがあるんだ」

クオンはゆつくりとキッカに歩み寄つた。

「君の右腕……それに右脚もかな」

彼は彼女のボストンバッグを提げる右腕と、腰からすらりと伸びた右脚に視線を移し、最後に再び彼女の瞳を見た。

「義体、じゃないか？」

キッカは、一瞬自分の耳を疑つた。今確かに、この男の口から『義体』という言葉が發せられた。

義体化技術のことは、ナショナル・エイド社 特別情報部第三課における機密事項だ。世間は勿論のこと、社内でもその存在を知る人間は数少ない。それが何故、自治区域に住むこの男の口から出るのだ？ 表情がひどく強張つているのが、自分でも分かつた。驚きのあまり、言葉が出なかつた。

「教えてくれ、タチバナさん。この義体化手術はどうで……いや、

誰から受けた？

クオンが彼女の両肩に手を置き、まっすぐに目を合させて更に問い合わせる。左肩の傷口を刺激しないように、気を遣っているのが分かった。

「……言えない」

喉から声を振り絞るように、よつやくそれだけぽつりと言った。

クオンは氣を悪くした様子もなく、落ち着いた声で言つ。

「じゃあ質問を変える。君は『川島宗吾』という医者を知っているか？」

キッカは軽く目を見開いた。カワシマ・ソウゴ。彼女にメモリー チップを託した、川島博士のフルネームだった。

クオンは彼女の反応を肯定と受け取ったのか、更に続ける。

「彼は今、ナショナル・エイド社にいると聞いた。君は、ナショナル・エイド社の人間か？」

彼女はその質問にも返答することができなかつた。

目の前のこの男は、一体誰なのだ？ 何故、川島博士の名を知つてゐる？ 頭の中では疑問符がぐるぐると渦を描いた。

「教えてくれ、タチバナさん」

クオンの瞳に、縋るような、切実な色が過つた。

「あなたは……一体……？」

彼女の問い掛けに彼は手を離し、來ていた服の右袖を捲り上げる。すると肘より少し上の辺りに、僅かではあるが手術痕のようなものが見えた。

「俺の本当の名前は、久遠慧^{クドウ・ケイイチ}。元自衛隊陸軍の三尉だ。九年前、コマキ自治区で川島先生から義体化手術を受けた」

キッカは信じられない気持ちで彼 クドウ元三等陸尉 を見つめた。九年前。すなわち彼女が義体化するより四年前、川島博士がナショナル・エイド社に来るよりも前に、義体化手術を受けたということだ。

「クオンさん、一体どういうこと？」

ふいに彼の立つ後ろから、ハイトーンの声が掛けられた。クオンを追つてきたユナだつた。今の今まで、何か切迫した雰囲気の二人のやりとりに、声を掛けるタイミングを摑めないで様子を伺つていたのだ。

「ユナ……？」

「ギタイ、つて、何？」

ユナの顔が、見る間に蒼ざめていくのが分かる。

クオンはキックカとユナの顔を交互に見、そして小さく溜め息をついた。

「……事情を説明するから、俺の家に行こうか」

彼の家は、店からそう遠くないところにある、低所得者層が多く住む古いアパートだつた。

薄い木製の扉を開くと、そこは明らかに堅気の者の部屋ではない異質な雰囲気に満ちていた。ワンルームの部屋の壁いっぱいに設置された棚には、数々の武器が整然と並べられている。ひとつしかない窓の近くには小型のパラボラアンテナが置かれ、傍受した電波の記録が起動しつ放しのパソコンのモニターに映し出されていた。まるでテロリストの部屋だ。ユナはその部屋の様子だけでもかなりのショックを受けたようだつた。

「さて、何から話そうか」

彼は部屋の中でも最も場所を取つていい簡易ベッドに一人を座らせ、その目の前に置かれた何かの機材のような箱の上に薄い「コーヒー」の入つたマグカップを二つ置いた。彼自身は一人の反対側、やはり何かの機材の上に腰掛け、脚を組んだ。

「元自衛隊、という話だけだ」

キック力が促す。

「ああ、そうだな。まずそこから話を始めるのがいいんだろうね」

彼は十年前の、反合衆国軍ゲリラに対するコマキ自治区攻撃の話

を静かに語り始めた。彼の所属部隊が最前線に配置されたこと。多くの仲間を失つたこと。

多数の一般市民の死傷者を出した内戦は、キッカの記憶にも残つていた。一方のユナは、はつとした表情をしていた。彼女自身も、その内戦の被害者なのだ。

「あれは作戦と言えるような代物じゃなかつたな。とにかく破壊しまくる。ゲリラ軍を燐り出すための、ローラー作戦だ。敵味方問わず、曰く」とに被害者の数が膨れ上がつた。前線にいる奴らの精神状態にもすぐに限界が来た。そんなある日、俺は運悪く足元に埋められた地雷を踏んだ。そして右腕と両脚を失つた」

彼は左手で、右腕の生身と義手の継ぎ目の部分をさすつた。

「それでもつて、目覚めたら『川島病院』にいた。気づいた時には、俺の右腕と両脚は義体に変わつていたんだ。とは言つても、君みたに凄い力のあるものじやない。生身の身体と同じ機能しか持たない義体だ」

川島医師が内戦で負傷し手足を失つた者を敵味方問わず収容し、救つていたこと。医師の息子がそれ以前に内戦で命を落としていること。看護師として働いていた医師の娘、ハルカのこと。一家の母親がナショナル・エイド社にいたこと。彼はひとつづつ記憶を確かめるように、ゆっくりと話をし続けた。

「……ハルカと俺は、恋人同士だつた。俺はその後『川島病院』で三年間、看護師として彼女と一緒に働いた。思えばあの三年間が俺にとって一番平和だつたかもしれないな。でも、それは唐突に終わつた」

彼は眉根を寄せながら、運命の夜のことを話した。夜中に合衆国軍と思しき部隊が病院に侵入し、患者やスタッフを次々殺していくこと。川島医師の、彼らの狙いが自分であることを伺わせるような発言。そして、彼とハルカはコールドスリープ装置で眠りに就いたこと。

「俺はちょうどその一年後、コールドスリープから目覚めた。川島

先生は装置の解除に来ると言つていたが、結局無理だつたようだ、

タイマーがセットされていた一年後に目が覚めたんだ」

「……ハルさんは？　ハルさんも、一緒だつたんでしょう？」

ユナが恐る恐る口を開く。ハルの話が出た辺りから、彼女はずっと俯きかけていた。

彼女の問いを受けて、彼の瞳に何とも言い難い哀しみの色が浮かぶ。

「ハルさんは、目覚めなかつた」

彼は膝の上で握り合わせた両手に視線を落とし、静かに息を吐いた。こつこつと、時計の秒針が時を刻む音が部屋に響いていた。

「理由はよく分からぬ。タイマーは正常に動いてたし、冷却装置も問題なかつた。でもハルさんは目覚めなかつた。最初は装置の覚醒機能の障害かと思って機械を調べたが、何の異常もなかつた。機械のせいじゃないとしたら、ハル自身の問題だらうと思つ。彼女自身に何か問題があつて、覚醒機能が作動しなかつたんだ」

彼は一度そこで一息ついて、小さく首を横に振つた。しばらく沈黙を続けた後、彼は再び口を開いた。

「それから俺は、川島先生を探した。病院が合衆国軍の襲撃に遭つた理由が知りたかったからだ。先生は明らかに何かを隠していたと思う。　それにハルさんを目覚めさせることができるのは、きっと先生だけだ」

それまで黙つて話を聞いていたキッカが、口をはさんだ。
「それで、川島博士がナショナル・エイド社にいるということを突き止めた」

「そう。コマキはまだ不安定だったからな、ハママツに越してきたんだ。俺は名前と元自衛隊員という経歴を捨て、ここでなんでも屋をしながら、情報を集めた。でも、統制区域にはなかなか入ることができるない。先生がシミズにいるっていう情報は入手できても、ここからの距離以上に統制区域への壁が高かつた。それで悶々としているときに、タチバナさん、君が現れた。俺は先生があの会社で、

強化義体の研究開発をしているという情報を掴んでいた。それでさつきの君の動きを見て、ぴんと来た

「彼がじつとキッカを見つめる。先ほど道で呼び止められた時と同じ、縋るような色が彼の瞳に浮かんでいた。

「改めて尋ねるよ。タチバナさん、君は何者なんだ？」

キッカは観念したように小さく息をつき、ぱつりぱつりと話し始めた。

「私は、もともとシズオカ統制区に家族で暮らしていた。一般市民だった。それが五年前にシズオカで起きたテロに巻き込まれて、私は一回死んだ。心臓を撃ち抜かれたんだ。でも、目覚めたらナショナル・エイド社の施設にいた。川島博士の手で、人工心臓を移植されていた」

人工心臓、というフレーズに、彼が一瞬反応した。

「だから恩を返すために、右腕と右脚を戦闘用義体に換えた。以降、ナショナル・エイド社に入社して、特殊任務をこなす日々を送っていた」

特殊任務の違法性については、敢えて触れなかつた。言つ必要もないことだし、話の本筋からしたら蛇足だと思つたからだ。

「そして昨日の午前中、川島博士から呼び出しを受けた。実験にするデータを世間に公表してほしいと、しかしそれは会社を裏切る行為だと言つた。博士は会社の言うなりに研究を続けてきたことを、酷く後悔している様子だった。私の恩人は博士であつて、会社じゃない。だから私は博士の申し出を受けた」

「なるほどね」

彼は今度こそ、納得した様子で頷いた。キッカは少し視線を落とした。

「そして昨日と今日の二度、襲撃を受けた。あれは……合衆国軍兵だつた。『川島病院』を襲つた連中も合衆国軍だと言うなら、何かそこにつながりがあるような気がする」

彼は顎に手をやり、考え込むような仕草をした。いざれにしても、

川島医師本人の口から事情を聞かないと何も解決しないことばかりだ。少しの間があり、彼が再び口を開く。

「それで、託されたデータはどんなデータなんだ？ 中は見た？」

キッカは首を横に振った。

「いや……中身は知らない方が良いと、博士に言われて」

彼は首をひねる。

「どんな内容か知らなきや、どう公表したら良いかも分からない気がするけどな。そのデータ、今持ってる？」

キッカはウエストポーチからメモリーチップを取り出し、彼に手渡した。彼は手慣れた様子でハードディスクにそれを挿し込み、読み込みを開始する。

「……何だこれ、何重も暗号化されてるな。すぐには見られなさそうだ」

「そんな……」

キッカは軽く途方に暮れた。データを持ち込む先も見つかっていない上に、仮に見つかってしても読み込めないデータでは意味がない。彼女自身に暗号を解除する技術、もしくは時間的余裕があるかどうか微妙なところだ。

そんな彼女の様子を見ていた彼は、少し考えた後で口を開いた。「俺の知り合いに、ハッキングの得意な奴がいる。そいつに頼めば復号化してくれると思う。うまくすれば、そのままネット上に公表することもできるだろう。ネット上の情報規制は厳しいが、そいつにかかるは不可能じゃないはずだ」

その言葉に、キッカは顔を上げる。

「その代わり、俺を川島先生に会わせて欲しい。それが交換条件だ」
彼女は一瞬躊躇つたが、すぐに頷いた。迷っている時間はなさそうだ。

「分かった。あなたを川島博士に会わせると約束する。データの方は、任せた」

「契約成立だな」

彼は右手を彼女に差し出す。彼女も、それを右手で握り返す。義手同士の握手だったが、お互いの固い意思を握り合つた。

「私のことは、キッカでいい。あなたのことは、何と呼べばいい？」

彼は肩をすくめた。そして何だかひどくショックを受けた様子のユナを見やつた。

「クオン、でいいよ。『クドウ・ケイイチ』はハルカと一緒に眠つてるから」

「分かった。よろしく、クオン」

キッカは唇の端をきゅっと上げ、笑みの形を作つた。これで一番大きな問題は解決したものと思って良いだろうか。しかしながら、新たに任務が増えてしまった。でも一人でデータの公表方法を悩んでいた時に比べたら、随分と心は軽くなつた気がした。

第6話・一 日田（3）「交錯する夜」

薄暗い路地を抜けた先に、一軒の店がある。クオンは慣れた手つきで木の扉を押し開けた。

その扉の向こうは、一見普通のダーツバーだった。

クオンは店内にいた何人かに軽く挨拶をし、するりと店の奥へ進んで行く。彼はたまにここで用心棒をする。スラムに近いこの店では、しばしば揉め事が起ころるからだ。間接照明のみの店内はいつもほの暗く、クオンは店の客の顔を詳しく知らなかつた。彼らもまた、クオンの顔をよく知らないだろう。来る度にいつも同じ数名が店内にいると思っていたが、ひょっとしたら別人かも知れない。いずれにしても店の中に誰がいるかなどということは、彼にとつてはあまり関係ないことだつた。

クオンはカウンターの後ろ側にある『STUFF ONLY』と書かれた扉の中へ入つていつた。その中は、これまた一見普通の従業員スペースだった。部屋の手前には従業員の勤務時間を管理するためのタイムレコーダーや電話機があり、奥には縦型ロッカーが並べられている。壁際に設置されたスチールラックにはいろいろな備品が置かれていた。

クオンはラックの横に積み上げられていた一段の木箱を手前にどかした。その床に敷いてあつた小さなマットをめぐると、床下貯蔵庫の蓋のようなものが出でてくる。その蓋を持ち上げると、下へ降りる階段が現れた。

彼はその狭く急な階段を用心深く降りた。そして階段の突き当たりにある鉄の扉を、ある一定のリズムでノックした。ややあつて内側から鍵が開く音がし、重い扉が開けられた。

「なんだ、クオンか」

中から現れたのは、ボサボサの髪を後ろで乱雑に束ねた、眼鏡に無精髭の男だつた。クオンは肩をすくめる。

「なんだとは」挨拶だな、ミズコシ。仕事を持ってきてやつたぞ」
ミズコシと呼ばれた男は、面倒臭そうに首をしきしきと鳴らす。
「持つてきてやつたつてな……」いちどら暇じゃねえんだぞ。恩着せ
がましく言ひなら、たまには女ぐらい連れて来いよ

そう言いながらもミズコシはクオンを部屋の中へ招き入れ、重い
扉を再び施錠した。その狭い地下室の中は、三つのモニターが所狭
しと並べられ、何台あるか分からぬハードディスクが絶えず激し
い作動音を上げていた。

「その、女からの依頼だよ」

そう言って、クオンはキッカから預かつたメモリー・チップをミズ
コシに差し出した。

「じゃあその女を連れて来いよ。こんなチップじゃ色氣の欠片もね
えだろうがよ。まったく、気の利かねえ男だな」

相変わらずの彼の口調に、クオンは苦笑した。ミズコシはメモリ
ーチップを検分する。

「で、このデータは一体何なんだ？」

クオンは真顔に戻り、少し低い声で言つた。

「ナショナル・エイド社と合衆国軍に関係するデータだ。例の、シ
ミズ支社で行われている研究の、実験データらしい」
ミズコシが目を見開く。

「マジかよ……本物だつたらどんなでもねえけどよ」

「本物だよ、間違いないく」

ミズコシはクオンの顔を見る。クオンが嘘を言つような人物でな
いことは、彼も知つてはいるはずだ。ミズコシは口元に不敵な笑みを
浮かべた。

「その依頼人の女、どんな素性だ」

「ナショナル・エイド社の特殊工作員で、例の川島博士からそのデ
ータを託されたらしい。世間に公表しろ、と」

「マジかよ……」

ミズコシは少し考えるような仕草をした。しかしその日に楽しげ

な光が灯っていることを、クオンは見逃さない。それを煽るよつこ、クオンは更に追い討ちを掛ける。

「依頼人の彼女には、合衆国軍の追手が掛っている。やっぱイヤマであることは間違いないな」

「そりゃヤベ。ヤベかもしけねえが……」Jのデータの中身には興味があるな」

メモリーチップを指先で弄るミズコシに、クオンは小さく笑みを作る。

「乞う受けてくれるか？」

ミズコシはにっと歯を見せる。

「高くつくな」

「臨むところだ」

クオンが額ぐのを見届けると、ミズコシは早速メモリーチップをハードディスクに挿し込んだ。機械は小さく呻り、モニターに数列が現れる。

ミズコシは軽く眉根を寄せた。

「なんだこれ、見たこともねえ暗号だな」

「解読できるか？」

クオンの問い掛けにミズコシは小さく頷き、再びにやりと笑みを浮かべた。

「俺を誰だと思ってんだ」

「頼もしいな」

クオンが今まで入手してきた情報は、ほとんどミズコシの協力によるものだった。彼の腕は本物だ。

「お前も手伝えよ」

ミズコシに促され、クオンは空いているモニターの前に座った。そして、ふと思いついたように口を開く。

「そうだ、その依頼人の彼女な、すごい美人だから今度会わせてやるよ。お前の好みとは違うかもしないがな」

ミズコシはははと笑い声を上げ、期待してるぜ、と軽い口調で

言った。

キッカは国道一号线を東へ上っていた。

田はどうに落ち、ところどころに灯った街灯と黄色点滅信号のみが道の続いていることを思い出させていた。普段街中に住んでいると気づかないが、人がいなくなつた夜の街は本当に暗い。車のヘッドライトが照らす範囲の外側は、完全な暗闇だつた。車内のデジタル時計は午後九時十三分を示している。

キッカがハママツ自治区を出発したのは、午後七時半過ぎだつた。当初、彼女もクオンと一緒に情報屋のハッカーのところへ行くつもりだつた。しかしどータが持ち出されたことが本社側にばれている以上、現在川島博士がどのような状況に置かれているか掴めないこと、またデータが公表されてしまつた暁に彼の身が無事である確証がないことから、一刻も早く彼を連れ出した方が良いと出発を始めたのだ。キッカ自身も追われている身なので安全ではないが、メモリー・チップをクオンに預けたことで少し身軽になつていた。

行きに乗ってきたレンタカーは、幸いキッカが乗り捨てたままになつていた。もともと返却しない　というより返却できない心積りで借りた車であり、よもや同じ車で来た道を戻ることになろうとは夢にも思つていなかつたので、彼女にしてみれば皮肉なことではあつた。彼女は道を見失わないよう慎重に、しかしできるだけ速い速度で、闇を切り裂いて車を駆つた。

車の後部座席には小型のグレネードランチャーが積まれている。出発時、クオンが錢別代わりにてくれたものだ。「こんな使う事

態にならない方がいいんだけどな」と言った彼の、心配そうな瞳を思い出す。もともと危険な仕事ばかりをしてきた訳だし、危険を退ける自信もあつたが、何故か彼に対しては反論する気が起きなかつた。

不思議な男だつた。元自衛隊員で非人道的な作戦にも参加させられ、手足も失つた。ようやく手に入れた幸せも、たつたの三年で非道な方法で叩き壊されてしまつた。それなのに、彼には歪んだところがひとつもないのだ。その瞳は、種々の過酷な過去に翳ることはあっても、決して希望を見失わない。物腰も穏やかで、どんな局面でも冷静だ。それがもともとの彼の性質なのか、恋人であるハルカという女性の影響なのかは、キッカには分からぬ。ユナという少女は彼に好意を抱いているように見えたが、それも不思議なことのように思えた。

そう言えば、ユナはクオンの過去をあのような形で知つてしまい、大丈夫だつたのだろうか。自分が現れたせいで、あの少女は知らなくとも良いことを知つてしまつたのだな。キッカは漠然とそう思つた。

いずれにしても、ハルカという女性にはキッカも興味があつた。川島博士からデータを預かつた時、彼はキッカのことを「娘のようになっている」と言つた。その博士の、本物の娘。一体どのような女性なのだろうか。博士を助け出せば、きっと分かる答えなのだろう。

今日一日で出会つた人々や起こつた出来事に想いを廻らせながら車を飛ばしていたキッカは、ふいに信じられないものを目にした。ヘッドライトが照らし出す暗闇から、人影が飛び出して來たのだ。彼女は反射的にブレーキを踏んだが、次の瞬間には前方からの強烈な衝撃に車内が激しく揺れ、コンパクトカーの軽い車体はスピ

した。タイヤがアスファルトと摩擦する耳障りな音が鼓膜に突き刺さり、彼女の視界は膨らんだエアバッグで塞がれた。

キッカがエアバッグに阻まれてシートベルトを外すのにもたついていると、突然何かが彼女の右腕を掴み、強い力で彼女の身体を車外へと引き摺り出した。

乱暴に地面へと投げ出された彼女は、反射的に受け身を取りつつその正体を見やつた。するとそこには大柄な体躯の男が一人、仁王立ちのような格好で彼女を見下ろしていたのだった。

キッカは身構え、低い声でぽつりと言つた。

「……誰だ」

男は答えず、キッカをじつと見ていた。車は何か固い物に衝突した時のように、フロント部分が大きく破壊されている。彼女が跳ね飛ばしたらしき人影は見当たらなかつた。これだけ車が壊れているのだから、ぶつかつた人物も無事であるとは考えにくい。周辺に素早く目を配つたが、それに該当するような人物が見当たらない。ただ、目の前に大柄な男が立つていてるだけで。

その男はにやりと笑うと、キッカに殴りかかつて来た。彼女は身体を翻し、それを難なくかわす。

しかし次の瞬間飛び込んできた光景に、彼女は自分の目を疑つた。なんと彼女が今まで倒れていた場所に打ち込まれた男の拳が、アスファルトをやすやすと突き破つて地面に穴を開けていたのだ。

当然、普通の人間ではできない芸当である。キッカは動搖を隠しながら、すばやく態勢を立て直して男に向き合つた。装備から見れば、この男もやはり合衆国兵のようである。

その男が何者かを考えを巡らす間もなく、キッカは右脚で彼の太い首へ回し蹴りを叩き込んだ。しかし男はびくともせず、逆に足首を掴まれて再び投げ飛ばされてしまう。再び叩きつけられる瞬間に受け身を取り、地面を転がる反動を利用して彼女は立ち上がつた。

アスファルトを突き破る拳、義体化したキッカの蹴りにも動じない頸椎、そして恐らく、時速約八十キロメートルの車とともにぶ

つかつても傷ひとつ付かない身体。行きついた答えに、彼女は激しく混乱した。

恐らく彼は、義体化した人間だ。

しかし義体化手術は、キッカの所属する特別情報部 第三課のメンバーにしか施されていないはずである。そのこと自体が課内のトップシークレットだ。

まさか義体化した彼女を追うために、手術を施された者なのだろうか。博士がそれを行うとは思えないし、また信じたくもなかつた。それに何より、この男の義体の持つパワーは、彼女が知る限りの義体の能力をはるかに凌駕している。ここまで強度、筋力を持つ義体は見たことがない。モリノでさえも、この男には力及ばないだろうと思われた。

キッカはホルスターから銃を抜き、躊躇いなく引き金を引いた。続けて一発、二発と急所に撃ち込む。放たれた銃弾はそれぞれ彼の眉間、心臓、左頸部に命中したが、そのどれもが皮膚を傷付けることなく弾かれてしまった。

こいつ、銃も効かないのか。

あまりのことに驚愕したキッカが見せた一瞬の隙を突き、男がその体躯に似合わぬスピードで一気に彼女との距離を詰める。そして彼女の鳩尾にボディーブローを叩き込んだ。その激しい衝撃に、彼女の意識は一瞬飛んだ。

気づくと受け身も取れないまま、背中からまともに地面に叩きつけられていた。喉の奥から呼気が漏れる。鳩尾への衝撃と背中への衝撃で、彼女は横たわったまま身体をくの字に曲げて激しく咳込んだ。

キッカが息を整える間もなく、次に男は右手で彼女の左腕を掴み、まるで人形でも持ち上げるかのように軽々と自分の目の高さまで吊るし上げた。そして空いた左手で彼女の顎を持ち上げ、驚愕で強張った彼女の顔を検分するようにまじまじと見た。暗視ゴーグルの向こう側に微かに見える男の目に下卑た色がちらりと映るのを、彼女

は見逃さなかつた。

次の瞬間キツカは急に解放され、じきりと地面に崩れ落ちた。そしてそのまま仰向けに倒され、組み敷かれてしまった。

「……！ やめろ！ 一体何のつもりだ！」

キツカが抵抗しようとすると、すかさず両腕を押さえ付けられる。「何のつもりか、だつて？」

男の口元が、にやりと嗜虐的な笑みを形作つた。

「俺はお前を殺せと命令を受けてきたが、犯すなとは言われてないからな」「

彼女は右脚で男を蹴り上げようとするが、下半身もがっしりとホールドされ、びくともしなかつた。

「たつぱり可愛がつてやるぜ、かわい子ちゃん」

男が彼女の耳元に口を寄せ、囁くようにそう言った。その言葉に、彼女は背筋がぞくりとするのを感じた。

考えてみれば、アスファルトを貫く男の拳が彼女の身体を貫けないはずはない。お前など殺そうと思えばいつでも殺せる。そういうパフォーマンスをした上で、彼女を凌辱するために敢えて手加減したのだ。

男は彼女の両手首を左手で押さえ付けたまま、空いた右手で彼女の身体をまさぐり始めた。彼女はそれから逃れようと必死に抵抗を試みるが、腕の拘束が解ける兆候は微塵もなかつた。無理矢理暴れようとする度、縫合したばかりの左肩の傷がずきずきと痛む。

「やめる！ 離せ！ 離せ……！」

「離すと思つか？」

男が実に楽しそうに言つ。口元は相変わらずにやにやと笑みを浮かべたままだ。男の手が服の中に侵入してくる。その右手は、無遠慮に彼女の乳房を揉みしだく。彼女はその痛みに思わず小さく声を漏らし、身を捩じらせた。

「なかなかいい反応だな。本当はお前も、して欲しいんじゃないのか？ ん？」

男の下卑た笑顔がキツカの顔を覗き込む。普通の男であれば、こんな状況になつてもすぐに跳ね除けられるのに。この男は自分に力があるのを良いことに、彼女の身体を力ずくで好きにしようとしている。最低の下衆野郎だ。キツカは男の顔を思い切り睨みつけた。

「睨んだ顔がまた最高にセクシーだな。気の強い女は好きだぜ。特に、気の強い女を押さえ付けて無理矢理ぶち込むのがな」

本当に、最低だ。彼女が無駄な抵抗をするのを、この男は心底愉悦しているようだつた。喉から思わず漏れてしまふ苦痛の吐息も、彼にとっては欲望を増長させる嬌声のように聞こえるのだろう。

「しかし殺すのに惜しいくらいのいい女だな。俺のペットにしてやろうか、首輪つけてな」

キツカの頭の中は、今や激しい怒りで満ちていた。しかしそれを相手にぶつけることもできず、ただ異常な力で一方的に抑え付けられるのみだ。

男は、屈辱感で震える彼女の唇を塞いだ。そしてねつとりとした舌を侵入させ、わざとねぢやねぢやと嫌な音を立てて彼女の口内を犯していった。

「んっ……」

キツカは喉の奥で小さく声を漏らした。背筋から立ち上る嫌悪感さえも、男の舌によつてぐちゃぐちゃにかき乱される。まるでそれ自体が单体で意思を持つているかのような

そこでふと、屈辱感で沸騰寸前の脳裏に、冷静な思考が過つた。

この男、一体どこまでが義体なんだ？

それまで防戦一方だつた彼女は、男に応えるように自ら進んで彼の舌に自分の舌を絡ませた。表側から、裏側へ。優しく吸いながら、やわやわと揉み解していく。するとそれに刺激されたかのように、男の身体がぴくりぴくりと反応するのが分かつた。彼女を薄目を開け、長い睫毛の下から男の顔を盗み見る。暗さとゴーグルで表情はよく分からぬが、それまで彼女の身体を這つていた手が止まつてゐる。

今だ。

キッカは目を見開き、自分の口内に侵入した男の舌を、思い切り噛み千切った。瞬間に鉄の味が口の中に拡がる。

男は突然の激痛に身を捩じらせ、思わず彼女を拘束していた手を離した。

彼女はその隙に男の身体の下から抜け出し、身を起こしながら口中に残った彼の舌先を吐いて捨てた。そして男が呻いている間に、一目散に掛け出す。目指すは彼女が乗つて来た車だ。

男に殴り飛ばされたせいで車まで三十メートルほどの距離があつたが、男が態勢を立て直して反撃してくるまでには十分な時間があつた。キッカは五秒程で車に辿り着くと、左リヤドアを開け、クオンからもらつたグレネードランチャーを探した。それは衝突の衝撃で後部座席の下に落ちていたが、損傷はなさそうだった。彼女はそれを引つ掴み、柄の部分を右肩に当てすばやく構えた。

すると舌を噛み切られた男が、怒り狂つて文字通り舌足らずに何事かを叫びながら、キッカに向かつて突進してきた。

キッカは迷わず弾を発射させる。その反動が予想以上に大きく、彼女は思わず尻もちをついた。

撃ち出されたグレネード弾は、轟音を立てながら弧を描いて飛び、男の身体に命中した。

着弾の瞬間、激しい爆発が起ころ。

男の動きが予想以上に速かつたため、射程範囲より内側で爆風が巻き起こつた。キッカ自身も熱波に軽く飛ばされるが、咄嗟に身を伏せて直撃を避けた。

爆風が収まるのを待つて、キッカは身を起こして後ろを振り返つた。

薄暗い街灯に照らされた着弾地点には、男の腰から下の部分だけが無残な状態で残つていた。辺りに人肉の焼ける嫌な臭いが立ち込

めている。

彼女はとりあえず、全身義体化男を倒したことにほっとして、すとんと膝から崩れるように座り込んだ。男の一物をずたずたに踏み潰してやりたい気分だったが、情けないことにつまづく立ち上がりそうになかった。

少し遅れて再び怒りと屈辱感が、鳩尾の辺りから湧き上がってきた。圧倒的な力で支配しようとする男。橘菊花という人格を全て否定し、ただ自分の欲望を処理するための道具としてしか見ていない男。これまでにない侮辱を受けた気分だった。

でも。キッカガが女だったからこそ、結果的に命が助かったのだ。あの男がその気になれば、彼女など簡単に殺せただろう。そう思ふと、とても複雑な気分だった。

ふと、左腕をつ、と何かが伝つて行つた。血だ。左肩口の傷が開いてしまつたようだつた。男に押さえ付けられていた両手首が痣になつてゐる。髪もいつの間にか解けてぼさぼさの状態だし、服もところどころ破かれていった。何より、全身の疲労感が凄い。

シズオカ統制区への道のりはまだまだ遠いが、キッカには休息が必要だつた。車も破壊されてしまつたため、この宵闇の中、自分の脚で目的地を目指さなければいけないが、それには体力を消耗しきっていた。

しかしそのこと以上に、またピンポイントで刺客に襲われたことが気がかりだつた。

とりあえず、どこか休める場所を探そう。キッカはゆっくりと立ち上がり、身を隠すのに最適な場所を求めて歩き始めた。

んやりと天井を見上げていた。

今日という一日のことを、とりわけ夕方以降に起こったことを思い出すと心が激しくかき乱され、何をして過ごせば良いか分からなかつたのだ。本当なら店の手伝いをしている時間だったが、幸か不幸か店は夕方の一件からまだ片付いていなかつたため、今日は臨時休業だつた。

「クオンさん……」

ユナは想い人の名前を呟く。それは、存在しない人の名前だつた。クドウ・ケイイチ。それが彼の本当の名前だ。でも彼女はそんな人物は知らない。知らない人を好きになつて、ちょっとしたことに浮いたり沈んだりしてゐたのだ。

その知らない人には、恋人がいた。彼は恋人を助けるために、この街に來た。そしてユナと出逢つた。

「最初から、全然無理だつたんじゃない……」

歳が離れすぎていることもあり、クオンから恋愛対象として見られていないことは分かつてゐた。でもそれはユナがまだ少女だからで、年月が経てば解決できる問題だとばかり思つてゐた。彼はいつも穏やかで優しく、今はそれで良いと思つてゐたのだ。

「全然、駄目だつたんだ……」

寝転んだ瞳から零れた涙が、こめかみを伝つて髪を濡らした。そして彼が『クドウ・ケイイチ』だつた頃のことを想つた。

彼が辿つた激動の運命。ユナ自身、内戦で家族を失つていたが、彼は自分の身体を失つていた。義体という技術のことは初めて聞いたが、自分のものでない身体を自在に動かせるとは、何だか不自然でショッキングな話だつた。そして彼の恋人、ハルカのこと。絶望のどん底にいた彼に希望を与えた女性。一体どんな人だつたのだろう。

「クオンさん、クオンさん、クオンさん……」

キックを見送つた後、彼はユナを店まで送つてくれた。今日の昼までだつたら、彼と二人きりで並んで歩くなんて、この上ない幸運

だと狂喜したに違いない。でもその時ばかりは、全くそんな気分になれなかつた。別れ際に彼が「いきなり重たい話聞かせてごめんな」と言つた。いつもと変わらない優しい声。彼女が無言で首を横に振ると、それを見た彼はふつと微笑んで、大きな手を彼女の頭にぽんと置いた。とても温かい手だつた。その温もりを思い出すと、また涙が溢れてくる。

一人で見送つたキッカは、そろそろシズオカ統制区に到着する頃だろうか。強い意志を持つた、特殊工作員の女性。彼女が助け出そうとしているのは、ハルカを目覚めさせることができる唯一の人物だ。ハルカが目覚めてしまつたら、クオンはこの街から去つてしまふのだろう。

ではもし、キッカが博士を助け出せなかつたら?

ハルカが永遠に目覚めなかつたら?

……そうなつたら、彼はユナのことを見てくれるだろうか。

その考えに至り、彼女は自分の中の黒い陰に驚いた。人の不幸を望むなんて、あたしはなんて汚くて醜いんだろう。

彼女はクッションを顔に押し当て、喉から漏れる嗚咽を殺した。

今夜はとても眠れそうになかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3684z/>

無神論者たちの唄

2011年12月26日22時53分発行